



Contents

【特集 第22回大会】

- 2 開催概要、プログラム
- 5 JMMA第22回大会をふりかえって..... 水嶋 英治 (JMMA会長)
- 6 JMMA第22回大会開催の趣旨..... 小川 義和 (JMMA副会長・大会実行委員長)
- 8 特別講演「触文化展示の意義と方法 ー多様な『from』を育む博物館ー」
..... 広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館准教授)
- 17 シンポジウム (指定討論)「多様化する社会とミュージアム ー文化創造の原動力となるミュージアムー」
パネリスト:大高 幸 (放送大学客員准教授)・可児 光生 (美濃加茂市民ミュージアム館長)・山内 利秋 (九州保健福祉大学准教授)
モデレータ:江水 是仁 (JMMA理事、東海大学課程資格教育センター准教授)
- 30 学会賞受賞記念講演「動物園におけるミュージアムマネジメントの実践」
..... 牧 慎一郎 (大阪市天王寺動物園長)
- 35 【哀悼 大堀哲名誉会長】
「大堀名誉会長を偲ぶ」..... 高橋 信裕 (JMMA理事・前事務局長)
「大堀哲先生を偲ぶ会」開催のご報告 事務局
- 36 【インフォメーション】JMMA第23回大会開催日程・会場決定!、文献寄贈のお知らせ、新規入会者のご紹介、
法人会員一覧

特集

平成29年6月3日(土)～4日(日)に東京家政学院大学で開催しました第22回大会について報告します。

日 程：平成29年6月3日(土)～4日(日)
 会 場：東京家政学院大学(千代田三番町キャンパス)
 主 催：日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)
 共 催：学校法人 東京家政学院
 会 費：【大会参加費】
 会 員：2,000円(個人・学生・法人会員同額、早割1,000円)
 非会員：一般3,000円(早割2,000円)、学生2,000円(早割1,000円)
 ※当日入会者は会員扱い。
 【情報交換会費】一般：4,000円(早割3,000円)、学生：3,000円(早割2,000円)
 参加者数：延べ185名(3日=117名、4日=68名)

[大会テーマ]

多様化する社会とミュージアム ―文化創造の原動力となるミュージアム―

[開催趣旨]

様々な試練の中にある日本のミュージアムは、今後どの方向に向かうべきか、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、東京五輪)に向けて「国際化」「多様化」する社会の中であって何をすべきか、などが問われています。

本学会は、平成27年度からの3年間は、急激に多様化する社会状況に対応する「ミュージアムマネージメントの新しい在り方」について、「多様化する社会とミュージアム」を3年間のメインテーマに掲げています。平成27年度は「組織のマネージメント」をサブテーマとして、「博物館法の改正」や指定管理制度における「ミュージアムの組織マネージメント」などを取り上げてきました。平成28年度は北海道において大会を開催し、「人々とともにつくるミュージアムの文化的価値」をテーマに北海道の各博物館が創造する文化的価値に注目して、人々とミュージアムが共有できる価値を創造し、地域と共生するミュージアムマネージメントを考察しました。

今後2019年の京都ICOM大会(Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition)、2020年の東京五輪、国立アイヌ民族博物館の開館等に関連する文化ムーブメントを踏まえ、本年度は「多様化する社会とミュージアム―文化創造の原動力となるミュージアム―」を年間活動テーマとして、地域社会における文化の原動力としてのミュージアムの役割を考えます。学問分野の多様化に加え、来館者の多様化、ライフスタイルの多様化、観光、福祉、医療、地域活性化、ミュージアムの社会的使命の高度化など、ミュージアムを取り巻く環境は多様化しています。このような多様化する社会においてミュージアムマネージメントが地域文化の創成に果たすべき役割は大きく、将来に向けてその可能性を探ることが重要です。本学会としては、大会を契機に各研究部会・支部による研究活動をさらに発展させて、多様化する社会におけるミュージアムマネージメント理論の確立を目指していきます。



[プログラム]

● 第1日目【平成29年6月3日(土) 東京家政学院大学】

| 時間 | 内 容 |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 13:00 | 総会【階段教室】 (1) 平成28年度事業報告 (5) 平成29年度収支予算案 (2) 平成28年度収支決算報告 (6) 学会賞受賞者の報告 (3) 会計監査報告 (7) 25周年記念事業に向けての提案 (4) 平成29年度事業計画案 |
| 13:40 | 開会式【階段教室】 総合司会：黒岩 啓子 (JMMA理事、Learning Innovation Network代表) (1) 開会挨拶 水嶋 英治 (JMMA会長、筑波大学) (2) 挨拶 沖吉 和祐 (JMMA理事、東京家政学院理事長) (3) 大会趣旨説明 小川 義和 (JMMA副会長・大会実行委員長、国立科学博物館) |
| 14:00 | 学会賞授与式【階段教室】 |
| 14:30 | 特別講演【階段教室】 「触文化展示の意義と方法 —多様な『from』を育む博物館—」 講師：広瀬 浩二郎氏 (国立民族学博物館准教授) |
| 15:30 | シンポジウム(指定討論)【階段教室】 「多様化する社会とミュージアム —文化創造の原動力となるミュージアム—」 パネリスト：大高 幸氏 (放送大学客員准教授) 可児 光生氏 (美濃加茂市民ミュージアム館長) 山内 利秋氏 (九州保健福祉大学准教授) モデレータ：江水 是仁 (JMMA理事、東海大学課程資格教育センター准教授) |
| 18:00 | 情報交換会【ローズホール】 (1) 司 会 高橋 信裕 (JMMA理事、早稲田大学文学学術院非常勤講師) (2) 乾 杯 沖吉 和祐 (JMMA理事、東京家政学院理事長) (3) 中締め挨拶 牧 慎一郎氏 (大阪市天王寺動物園長) 布谷 知夫 (JMMAミッション・マネージメント研究部会幹事、三重県総合博物館特別顧問) |

● 第2日目【平成29年6月4日(日) 東京家政学院大学】

| 時間 | 内 容 |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 9:20 | 2日目開会【階段教室】 総合司会：黒岩 啓子 (JMMA理事、Learning Innovation Network代表) 開会挨拶 水嶋 英治 (JMMA会長、筑波大学) |
| 9:30 | 学会賞受賞記念講演【階段教室】 司会：松永 久 (JMMA副会長、株式会社三菱総合研究所) 「動物園におけるミュージアムマネジメントの実践」 牧 慎一郎氏 (大阪市天王寺動物園長) |
| 10:10 | 会員研究発表～午前の部～【階段教室】 司会：新 和宏 (JMMAコミュニケーション・マネージメント研究部会長、千葉県立中央博物館分館海の博物館館長) |
| 10:30 | 【1】ミュージアムと高齢者福祉の境界を越える 菅井 薫 (東京藝術大学美術学部 とびらプロジェクトコーディネータ) |
| 10:50 | 【2】科学技術系博物館の調査研究活動のマネージメント 亀井 修 (独立行政法人国立科学博物館) |
| 10:50 | 【3】地域の農林畜産業を切り口とした自然環境教育の可能性 小田嶋 祐希 (岩手大学大学院農学研究科共生環境専攻) 比屋根 哲 (岩手大学大学院連合農学研究科教授) |

● 第2日目【平成29年6月4日(日) 東京家政学院大学】

| 時間 | 内 容 |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11:00 | 【4】 口コミの計量テキスト分析による水族館の集客要因の抽出 竹村 寛行 (東京大学大学院経済学研究科マネジメント専攻) |
| 11:30 | 【5】 博物館職員を対象とした展示の新たな見方を促す研修プログラムの開発 原田 雅子 (独立行政法人国立科学博物館)・伊藤 彩子 (帯広百年記念館) 細川 咲輝 (独立行政法人国立科学博物館)・濱村 伸治 (独立行政法人国立科学博物館) |
| 11:50 | ポスターセッション概略発表【階段教室】 司会：田代英俊 (JMMA理事、科学技術振興機構) ①教育普及活動による被災地の博物館支援とその効果 小田嶋 祐希 (岩手大学大学院農学研究科共生環境専攻) 西澤 真樹子 (認定特定非営利活動法人大阪自然史センター) ②地域の歴史資源を活用したミュージアムコミュニケーション 「なめかたのクニ たんけん風土記」絵本プロジェクトを事例に 塚原正彦と筑波学院大学みんなのミュージアム研究会 (筑波学院大学) ③博物館と市民との協働活動におけるプロジェクト方式での企画設計 齊藤 有里加 (東京農工大学科学博物館) ④特別支援学校及び特別支援学級へ開かれた学習プログラムへ —国立科学博物館かほかスクールプログラムでの実践報告— 島 絵里子・松本 英和・鈴木 真紀・岩崎 誠司 (独立行政法人国立科学博物館 事業推進部 学習課) ⑤新しい視点と価値観の提案 —多様化する社会を生きる人々に、私たちができること— 吉川 美由紀 (鹿児島市観光交流局ジオパーク推進室) ⑥首都圏の水族館のフィールド調査：今後の改善と新サービスの開発に向けて 竹村 寛行 (東京大学大学院経済学研究科マネジメント専攻) |
| 12:00 | 休 憩 |
| 13:00 | ポスターセッション【1301教室】 |
| 14:10 | 会員研究発表～午後の部～【階段教室】 司会：中村 隆 (JMMAコミュニケーション・マネジメント研究部会代表幹事、科学技術館) |
| 14:30 | 【6】 館種を越えた博物館連携教育プログラムによる参加者等の行動変容に関する研究 西嶋 昭二郎・緒方 泉 (九州産業大学美術館) 【7】 未就学世代の科学リテラシー涵養を目的とした展示室における利用者調査について 小川 達也・赤尾 萌・神島 智美・渡邊 百合子・茂田 由起子 (独立行政法人国立科学博物館 事業推進部 学習課) |
| 15:00 | 閉会式【階段教室】 閉会挨拶 松永 久 (JMMA副会長、株式会社三菱総合研究所) 井上 敏 (JMMA理事・近畿支部会長、桃山学院大学) |

※会員研究発表およびポスターセッションの内容は、JMMAホームページの「刊行物」に「会報No.81 Vol.22-1 別冊Web版 第22回大会会員研究発表／ポスターセッション集」として掲載しております。(http://www.jmma-net.org/kankoubutsu/)

JMMA第22回大会をふりかえって

水嶋 英治 (JMMA会長)



去る6月3～4日の両日、JMMA第22回大会が大成功をおさめ、共催者として準備・運営していただいた学校法人東京家政学院ならびに沖吉和祐理事長（本学会理事）に厚く御礼申し上げます。

一昨年、JMMA創立20周年事業として、本学会の総力をあげて刊行いたしました『ミュージアム・マネジメント学事典』も一区切りがつき、3年後には25周年がやってまいります。

むこう3年間の活動計画も、現在、高安副会長をはじめ理事の皆さん方で検討していただいておりますが、25周年に向けた「新たな事業計画」がまとまりましたら、また会員の皆さんがたのご協力を得ながら進めたいと考えておりますので、その際にはよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

「文化創造の原動力」としての活動指針

さて、今回の大会テーマは「多様化する社会とミュージアム文化創造の原動力となるミュージアムー」でした。原点に立ち返って、改めて「ミュージアムとは何か」、「何のためにミュージアムはこの社会に存在しているのか」という本質的な問題を皆さんと一緒に、今回の大会全体を通して考えてみた気がいたします。

社会自体が多様化し、人々の生活様式も、ライフスタイルも、多様化しています。「激動の世の中」の流れに対して、ミュージアムはどのように対応していくべきなのでしょう。

「流れ」に巻き込まれてしまう「か弱い」存在ではなく、「文化創造の原動力」としてミュージアムが活動していくための活動指針を得たような気がいたします。

「ミュージアム・マネージメント」の重要性

世界的な動きを見れば、世界各地で過激化組織によるバンダリズムや遺跡破壊、文化財破壊が繰り返され、博物館資料も略奪されております。また、本来、「文化財」は平和のシンボルであり、その国の文化を表現する精神的支柱であるはずですが、近隣諸国の動きの中には反日運動の象徴として「文化財」を政治利用している例も見られます。

一方、国内に目を移せば、今春（平成29年4月12日）、某大臣が「学芸員はガンだ」という発言をして物議を醸しだしておりました。こうした状況を見ますと、残念ながら、まだまだ学芸員の存在や、私たちの研究領域である「ミュージアム・マネージメント」の重要性については（社会的には）認知されていないのだ、と思わざるを得ません。

若い研究者の皆さんや学芸員の皆さんは、こうした国のトップの発言に対して「やる気」を喪失するのではなく、むしろ反面教師として捉え、より一層、研鑽を積み自らを鼓舞し、奮闘し、研究に勤しんでいただければと思います。本学会としても人材養成プログラムを検討していく時期に来ているのだと痛感させられました。

その意味では、まだまだ研究すべき領域はあるように思いますし、学会として取り組まなければならない課題も多いように思います。

たとえば、多くの研究発表に見られましたように、①超高齢化社会の到来によって、ミュージアムはどのように社会に貢献するのか、②ミュージアム・ライブラリー・アーカイブとのMLA協力関係の構築のみならず、福祉分野や医療分野との協力関係を構築するにはどうしたらよいか、③地域活性化や観光化とのバランスをどのような視点でとらえ直すのかなど、掘り下げれば掘り下げればほど、ミュージアム・マネージメントがそうした問題のコアの部分にあることが、皆さんの研究によって明らかになっていくのではないかと思います。

広瀬浩二郎先生（国立民族学博物館）の「触文化展示の意義と方法」と題して特別講演があり、そのあと、現場で活躍されている先生方による指定討論もあり、活発な議論が展開されました。参加された会員の皆さんも新たな知見を得られたことと思います。

学びあい、支えあい、競いあいながら

JMMA研究紀要（第21号）の巻頭言にありましたように、沖吉和祐理事長は「学会は『学びあう』『支えあう』『競いあう』場である」と述べておられます。

私も、まさにその通りだと思います。学会である以上、研究成果を発表する場であるべきですが、お互いがお互いから学びあい、時には刺激しあい、語り合い、そ

して「多様化する社会」の要請に応えていかなければなりません。

ミュージアム・マネージメントの理論化のためには、裾野を広げ、また頂を高くしていくことも必要でしょう。今回の会員研究発表のタイトルを見ておりましたが、20年前と比べてみれば、山頂はどんどん高くなっている感じがします。一昨年、これまでの研究領域を整理し、新たな研究部会の再編案も提示されましたが、学びあい、支えあい、競いあう環境作りこそ必要であろうと考えます。

最後になりますが、JMMAは「会員の、会員による、会員のための学会」を標榜しております。研究者の数が多くなればなるほど、裾野は広がり、研究成果という山頂は高くなりますので、多くの新会員を受け入れながら、どうぞ会員の皆さん方の積極的な参画によって、学会を盛り上げていこうではありませんか。

この基本方針をもう一步拡大して「市民の、市民による、市民のためのミュージアムであるべきだ」と沖吉理事長は開会あいさつの時に述べておられました。

私たち会員一同は、学びあい、競いあい、支えあひながら、3年後の25周年をめざし、更に次の25年の未来を目指して邁進していければと思います。

物館法の改正」や指定管理制度における「ミュージアムの組織マネージメント」などを取り上げてきました。2016年度は北海道において大会を開催し、「人々とともにつくるミュージアムの文化的価値」をテーマに北海道の各博物館が創造する文化的価値に注目して、人々とミュージアムが共有できる価値を創造し、地域と共生するミュージアムマネージメントを考察しました。

今後 2019年の京都ICOM大会 (Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition テーマ: 文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ)、2020年の東京五輪、国立アイヌ民族博物館の開館等に関連する文化ムーブメントを踏まえ、本年度は「多様化する社会とミュージアム—文化創造の原動力となるミュージアム—」を年間活動テーマとして、地域社会における文化の原動力としてのミュージアムの役割を考えます。学問分野の多様化に加え、来館者の多様化、ライフスタイルの多様化、観光、福祉、医療、地域活性化、ミュージアムの社会的使命の高度化など、ミュージアムを取り巻く環境は多様化しています。このような多様化する社会においてミュージアムマネージメントが地域文化の創成に果たすべき役割は大きく、将来に向けてその可能性を探ることが重要です。多様化する社会においてミュージアムマネージメントを構築するためには、社会の変化に対応したマネージメントを考えるだけでなく、将来の社会を見据え、ミュージアムが社会に働きかけるという価値創造型のマネージメントが必要です。本学会としては、大会を契機に各研究部会・支部による研究活動をさらに発展させて、多様化する社会におけるミュージアムマネージメント理論の確立を目指していきます。

JMMA第22回大会開催の趣旨

小川 義和 (JMMA副会長・大会実行委員長)



1. 本年度のテーマ

本学会は、2015年度からの3年間は、急激に多様化する社会状況に対応する「ミュージアムマネージメントの新しい在り方」について、「多様化する社会とミュージアム」を3年間のメインテーマに掲げています。2015年度は「組織のマネージメント」をサブテーマとして、「博

2. 多様化する社会とミュージアム

2016年度の北海道大会では、ミュージアムの文化的価値から多様化する社会を議論しました。すなわちミュージアムの文化的価値を「ミュージアムには、個人がミュージアムを楽しみ、知的な体験をするという個人的価値、ミュージアムが貴重な標本資料を集積し、調査研究の成果を発信している学術的価値、ミュージアムの活動が社会、経済、文化、教育に影響を及ぼす社会的価値がある。」と想定し、その三つの価値から見た社会の多様化を考察しました。

ミュージアムの学術的価値を支える学問分野そのものが、複雑系科学、分野架橋型・文理融合型、地域学など、多様化しています。同様に、外国人・障がい者など来館者、ライフスタイルの多様化など、人々の価値の多様化が、さらに、人口減少、少子高齢化、観光、福祉、医療、地方創生など、地域社会の多様化が考えられます (スライド1)。このようなミュージアムを取り巻

く価値が多様化するなかで、ミュージアムマネジメント理論の探究を行うのが本学会です。

3. 大会のトピック

本大会1日目は、博物館を利用する人々の多様性に注目し、国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎氏に「触文化展示の意義と方法 ―多様な『from』を育む博物館―」として基調講演いただきます。その後、文化創造の原動力となるミュージアムについてパネルディスカッションという構成です。

本学会のミッションであるミュージアムマネジメントの確立において、常に先人の知恵、範例を継承し、それらを超える新たな挑戦を繰り返して、新機軸を見いだしていくことが重要です。このような研究活動を「継承と革新」と表現し、2日目の会員研究発表会の内容と構成を見直しました。

本年度初めて学会賞受賞者による受賞記念講演会を設け、グッドプラクティスを会員皆様に紹介し、知恵を継承する機会を作りました。またポスターセッションも本年度から導入した制度です。これは革新の原動力となる取り組みです。若い会員の方々からの新鮮な研究発表を期待します（スライド2）。

多様化する社会とミュージアム

ミュージアムを取り巻く多様化する社会とは

■ 学術・学問分野の多様化

震災後の科学技術のあり方、複雑系科学、ミュージアムを支える資料・学術分野の多様化、分野架橋型、文理融合型、地域学、博物館学

■ 人々の多様化

外国人・障がい者など来館者の多様化、夕活など来館時間の多様化、ライフスタイルの多様化、価値の多様化、ニーズの多様化と高度化

■ 地域社会の多様化

公共サービス機関、人口減少、少子高齢化、観光、福祉、医療、地方創生、地域活性化、資源活用、クラウドファンディングなど、社会的使命・社会的要請の多様化

スライド1

JMMA第22回大会(東京大会)のトピック

<第1日 6月3日(土)>

■ 特別講演

「触文化展示の意義と方法 ―多様な「from」を育む博物館―」
国立民族学博物館准教授 広瀬浩二郎 氏

■ パネルディスカッション

「多様化する社会とミュージアム―文化創造の原動力となるミュージアム―」

パネリスト: 大高 幸 氏(放送大学客員准教授)
可児光生氏(美濃加茂市民ミュージアム館長)
山内利秋氏(九州保健福祉大学准教授)

モデレーター: JMMA理事 江水是仁 氏

<第2日 6月4日(日)>

- 学会賞受賞者による受賞記念講演
- 会員研究発表 7件
- ポスターセッション 6件

スライド2

特別講演

触文化展示の意義と方法

—多様な「from」を育む博物館—

広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館准教授)

はじめに

みなさん、こんにちは。今日は、学会の名誉ある基調講演の機会をいただき、たいへん感謝しております。この後、充実したプログラムでシンポジウムが続き、夜は情報交換会です。1日目が盛り上がり、いい形で2日目につながるように、なるべく楽しいお話をしたいと思います。

先ほど実行委員長からもお話がありましたが、文化を創造するのがミュージアムの重要な役割です。これは、今回の大会テーマでもあります。僕は民博、国立民族学博物館で仕事をするようになって17年目です。それ以前は、とくに博物館のことを勉強したわけでもないし、博物館で働こうと思っていたわけでもありません。お恥ずかしい話ですけれども、学生時代は博物館学、学芸員の資格取得の勉強もしていませんでした。たまたま就職先が博物館ということで、民博に着任してから、あらためてミュージアムについて考えるようになりました。

今日は「触文化」の話をしますが、世間で「しょくぶんか」といえば、まだまだ食べる方が一般的です。どんなに食べるのが好きな人でも、せいぜい日に4回か5回食べる程度だと思います。いちばん食欲があった高校時代、僕は朝昼晩に加え、おやつと夜食を食べていましたが、それでも5回です。一方、さわる方は、空気が顔に触れるとか、肌がいろんな事物を感じるなど、身体にリンクしています。文字どおり24時間、365日、人間は何かに触れているわけです。そう考えると、当然ながら食べる文化より、さわる文化の方が人間にとって身近で、なじみ深いはずです。2020年ごろには「しょくぶんか」と聞けば、みんなが触文化をイメージするようになってほしいなと願っております。

じつは、僕が触文化を提唱するようになったのは、民博就職後です。触文化とは、博物館について考える中で生まれてきた新概念だといえます。本日のテーマに引き付けて述べると、ミュージアムが触文化を創造したということになるでしょうか。触文化はまだ発展途上の概念なので、今日は現在進行形の実践報告をしたいと思います。

本論に入る前に、もう少し僕の自己紹介をします。僕は中学1年生の時に完全に目が見えなくなりました。そして、東京の盲学校に6年間通いました。個人的な話で恐縮ですが、盲学校時代、この大学の最寄りの市ヶ谷駅で、いつも僕は電車を乗り替えていました。6年間、

盲学校で勉強し、関西の大学に進学します。市ヶ谷駅で電車を降りるのは何十年ぶりでしょうか。この20年～30年の間に、ずいぶん日本社会は変わったかと、市ヶ谷に向かう電車の中で中高時代を思い出して、感慨にふけていました。僕が盲学校の中学部に通い始めたのは1980年代初頭です。そのころは、東京の鉄道駅でも誘導・警告用のタイル、いわゆる点字ブロックが敷設されていないホームがたくさんありました。自宅の最寄り駅でも、点字ブロックがありませんでした。

今日、JRに乗車していると、たまたま何組かの障害者に出会いました。駅員が車いす利用の肢体不自由者、白杖歩行の視覚障害者を誘導・案内しているのです。駅員は乗客へのサービスの一環で、ごく自然に障害者をサポートしています。僕も出張で全国各地を訪問するのですが、駅員が親切なので、安心して一人で出かけることができます。1980年代には、駅員に堂々とサポートを依頼するなんて、考えられないことでした。僕が盲学校に通っていた当時、介助者は自力で探し、駅員に「迷惑」をかけないのが当たり前とされていました。

こんな雑談をしていたら、昔話だけで講演が終わってしまうので、そろそろ本題に入ることにしましょう。僕が講演する際、パワーポイントは使いません。自分が視覚障害者であるということもあり、「見せる」のではなく、「聴かせる」講演にこだわっています。配布資料を適宜参照しつつ、僕の喋りに「注耳」してください。要旨集の中に簡単なレジюмеがあります。このレジюмеの項目に従って講演を進めていきます。参考資料として、封筒の中にA3を二つ折りにした新聞記事のコピーを入れています。資料I、資料II、資料IIIとなっていますので、レジюмеの該当箇所を説明します。

先ほど申し上げたように、基調講演とはいうものの、まだ僕自身、発展途上の研究者です。本日は、基本的に自分が取り組んでいる最近の活動を紹介しつつ、そこから後半のパネルディスカッションにつながるような話題を一つか二つ提供できればと願っています。



障害者芸術祭の体感展示

まず、資料Iの新聞記事をご覧ください。これは、2017年2月に奈良県で開催された展覧会、イベントの紹介記事です。みなさんは国民文化祭、障害者芸術・文化祭という行事をご存知ですか。国民体育大会、国体はスポーツの祭典で、テレビなどでも取り上げられるメジャーなイベントです。国民文化祭はその文化版で、各県が毎年、持ち回りで担当しています。2016年が愛知県、17年が奈良、そして18年は大分という順番になっています。

2017年の9月から11月にかけて、音楽・文芸・アートなど、国民文化祭関連のさまざまな行事が奈良県内で実施されます。これまでは、国民文化祭の後に障害者芸術・文化祭が開かれていました。障害者芸術・文化祭では、主に知的・精神障害の当事者たちが制作する作品、いわゆる「障害者アート」が収集・展示されてきました。国民文化祭と障害者芸術祭の位置づけは、オリンピックとパラリンピックの関係に似ています。昨今、2020年のオリンピック・パラリンピックを意識した活動が多方面で展開しています。僕たち障害当事者にとって嬉しいのは、パラリンピックの社会的認知度が高まっていることです。「オリパラ」などと称して、オリンピック・パラリンピックがセットで報道されるようになりました。

従来、パラリンピックは福祉、リハビリの文脈でとらえられてきましたが、ようやくスポーツとしての市民権を得たともいえます。これは先ほどの鉄道駅のエピソードと同様に、社会の成熟として評価できるでしょう。しかし、冷静に考えてみると、オリンピックという大きなお祭があって、その後に障害者による小規模のお祭が続く。言い方はきついが、パラリンピックは「後の祭」なのです。

理想を言えば、100メートル競走でウサイン・ボルトが走った後に、次は車いすの部です、次は視覚障害の部ですというように、多種多様な特性を持つ選手たちが100メートル走に挑む。そうすると、競技会としてもおもしろいし、真の意味で「ユニバーサル」を体現できると思います。でも、国際大会の組織運営上、オリンピックとパラリンピックを同時開催するのは、現実的には不可能です。

国民文化祭、障害者芸術祭は日本国内のイベントなので、2017年の奈良大会から同時開催・一体開催が試みられることになりました。この試みは画期的で、やはり僕たち障害当事者にとっては喜ばしいことです。これまで「障害」に直接関心がなかった人が、たまたま訪れた会場で「障害」を知る。国民文化祭が「障害」理解を広げ深める有意義な場として定着することを期待します。奈良の取り組みが成功すれば、同じ形で各県が国民文化祭、障害者芸術祭を同時開催していくことになります。ですから、奈良での実験はきわめて重要で

しょう。

資料Iは、本番前のプレイベントとして2017年2月に行なった展覧会の新聞記事です。国民文化祭と障害者芸術祭の同時開催が決まりましたが、それでは具体的に何をすればいいのか。何をすれば同時開催の意義をアピールできるのか。前例がないので、正直なところ、奈良県庁の担当者も暗中模索状態でした。2016年の初夏、奈良県庁の方々が僕を訪ねてくれました。障害当事者として、博物館で仕事をする僕に、イベントの相談が舞い込んだわけです。いろいろ話し合う中で、少しずつイベントの方向性が固まってきました。

さわるとはユニバーサルな（誰もが楽しめる）文化であると、僕は考えています。目が見える・見えないに関係なく、触覚は万人が保持しています。手が使えなくても、身体他の部分で物に触れることができます。日本語が十分理解できない外国人も、さわる展覧会なら楽しめるでしょう。現在の博物館は社会教育、生涯学習の拠点なので、展示解説やキャプションは知的障害者にはアクセスしにくいものです。でも、さわる展示なら知的障害者の感性に訴えることもできます。障害の有無に関係なく、みんなが楽しめるイベントは、さわる展覧会である！奈良県庁の方々の賛同を得て、僕たちは国民文化祭、障害者芸術祭の同時開催を象徴するイベントとして、「さわる」を中心に、体感展示を企画することになりました。

2017年2月に奈良県文化会館を会場として、「さわる楽しむ体感展示」を開催しました。プレイベントなので、会期は10日間ほどでした。僕は個人の人々の多様性を尊重したいので、県民性という発想はあまり好きではありません。しかし、奈良県の人にはなんとなくおとなしくて、奥ゆかしい印象があります。今日、会場に奈良県出身の方がいらっしゃったら、ちょっと申し訳ないですが、展示の広報が上品というか、下手だなあと感じるものが何度もありました。プレイベントの開催が県民に十分伝わらなかったのは残念です。

会期中に雪が降ったりして、天候はよくなかったのですが、それでも公的発表では来場者1,000人でした。実際の来場者数は996人だったのですが、最終日の閉館間近に県庁の方が会場の出入り口を4往復し、「これで1,000人ということにしましょう」となりました。県庁職員は律儀ですね。プレイベント10日間で1,000人というのは悪い数字ではないし、来場者のアンケートも好評でした。プレイベントの趣旨を継承し、秋の本番では体感展示をさらに充実させて実施しようという方針で、今、少しずつ準備を進めています。本番では予算もしっかり確保されているし、会期も長くなります。今度は広報も頑張っ、「次」につながるような展示を具体化したいです。

「さわって楽しむ体感展示」を企画・実施するに当たって、県庁の方々ときざまな議論をしました。「さわって楽しむ体感展示」というタイトルでは一般受けしない。そもそも、「さわって楽しむ」と言われても、何にさわることができるのかわからない。ほんとうは副題で「〇〇にさわろう」「××を体感」などというフレーズを入れたかったのですが、じつはぎりぎりまでどんな展示物を並べるのか、決まっていませんでした。副題を入れたくても、入れることができない事情があったわけです。

本番を盛り上げるためのイベントですから、来場者数が少ないのは困ります。できれば、「障害」に関心がない方に気楽に会場に来ていただきたいというのが、体感展示本来の狙いです。そこで、会場入り口で何か目立つ映像を流しましょうということになりました。この点については、今でも多少の自己矛盾を感じています。先述したように、僕は自分の講演などでは映像を使わないことにこだわっています。それに、「視覚以外の感覚で楽しもう」という展覧会の入り口で映像を流すのは、やはり「看板に偽りあり」ですね。とはいえ、映像が客寄せとなり、会場の中でじっくりさわる体験してもらえればいいのかと、気持ちを切り替えました。

さて、それで映像です。ほんとうは、有名な女優さんに出演していただき、奈良の街を歩きながら、いろいろな物にさわるプロモーションビデオがいいのですが、なにせお金がありません。県庁の方はさすがに「仕方ない」とは言いませんでしたが、「広瀬がいい」ではなく、「広瀬でいい」という雰囲気、僕が出演(?)することになったのです。イベントの会期中、会場入り口で僕の映像がエンドレスで流れているのは、なんだか不思議な気分でした。

結論から言うと、この映像の効果はほとんどありませんでした。僕の友人も多数、体感展示に来てくれました。展示そのものについては「おもしろかった」という声が多かったのですが、入り口の映像に気づく人はごく少数でした。少々がっかりしたのは事実ですが、会場内の展示の満足度は高かったのも、安心していい。直接的な効果はあまりなかったものの、さわる行為、さわり方のポイントを映像として示すというのは斬新な試みであり、僕のユニバーサル・ミュージアム活動にとっても一歩前進といえそうです。

「見識」と「触識」

民博着任後、僕は各地でさわる展示、ワークショップを行なっています。ワークショップの場合は、多種多様な民族資料を回覧しながら、「このようにしてさわってください」と説明します。僕の説明を聴いてから参加者がさわるので、触察の意義を比較的容易に伝えることができます。一方、展覧会では「さわるマナー」を伝

えるのが一苦労です。

2012年に民博の常設展示として、「世界をさわる」コーナーが設置されました。このコーナーに立ち寄る来館者の反応は両極端の2パターンに分かれます。一つは小学生の団体客です。一人一人はいい子でも、子どもが集団化すると狂暴になります。「さわってもいい→遊んでもいい→壊してもいい」。小学生が資料を乱暴に扱ったことにより、破損事故が何度か起きています。もちろん、僕たちも破損・汚損の危険を考慮し、耐久性に優れた資料を選定・展示していますが、こちらの予想を上回る激しさ、強さで資料に接する来館者がいるのが現実です。「自由にさわってください」というスタンスで、露出展示をするだけでは、「さわるマナー」を普及していくことはできません。

もう一つ、「世界をさわる」コーナーを訪れる来館者の特徴的な反応があります。それは、少なからぬ大人たちがさわろうとしないということです。おもしろそうな展示資料を並べて、「どうぞさわってください」というしつらえにしているのに、大人は「ああ、動物の彫像があるね」と眩き、チラッと見るだけで通り過ぎていきます。もったいない話ですね。博物館・美術館は見学する場所であり、さわってはいけないという「常識」が刷り込まれているのでしょう。

さわる展示、ハンズオンを実践しても、来館者は意外とさわらない、もしくはさわすぎて資料を壊してしまう。どのようにさわるのか、なぜさわるのか。さらには、さわらなければわからないことがある。僕は「触文化」という言葉を用いて、さわる世界の豊かさ、奥深さについて書いたり、喋ったりしています。しかし、それだけではまだまだ不十分です。触文化を映像として表現し、不特定多数の人に見てもらおうのは、「さわるマナー」の周知という点で有効かなと感じています。

残念ながら奈良のイベントのアンケートでは、触文化のプロモーション映像に対するコメントがまったくなかったのも、おそらく秋の本番ではこのビデオはボツでしょう。でも、DVDの形で映像を残すことができたので、他の場所でも利用できるのが嬉しいです。本番でボツになるのが悔しいので、今日はみなさんに映像を見てください。映像は3分程度です。〔DVD上映〕

DVDの中で僕がさわっているのは、国宝の興福寺仏頭です。歴史の教科書でもよく取り上げられる有名な仏頭で、以前は山田寺仏頭と称されていました。白鳳時代を代表する仏像彫刻で、現在は興福寺が所蔵しています。僕がさわっているのは模造品ではありますが、形や色はもちろん、素材にもこだわった精巧なレプリカです。国宝なので、普段は写真を見るだけで、実物に間近で接する機会はありません。宝物館に行っても、遠くから眺めるのみです。

今回はレプリカとはいえ、自分が息を吹きかければ届く距離に仏頭があり、手を伸ばせばさわることもできます。国宝を体感できる展示は貴重です。新聞掲載の写真でも、この仏頭レプリカにさわるシーンが使われていますが、国宝に触れる体験が来館者にインパクトを与えたのは間違いありません。

お配りしたレジュメには、「手」は「頭」と「体」を結びつける(国宝レプリカの手触りが、単なる知識を『触識』に変換する)」と書いています。この「触識」という言葉は僕の造語です。世間一般では「見識」という語が用いられています。「見識」の背後には、知識・常識は見ることによって獲得されるという考えがあります。しかし、さわることによって獲得される知識・常識もあるはずです。

映像でも解説していましたが、僕が仏頭レプリカにさわった際、いちばん印象に残ったのは左の耳です。耳の下の部分が欠けていましたね。耳が欠けていることは、目でも確認できます。僕は、欠けた耳を視覚的に確かめることはできないわけですが、耳のギザギザの断面に触れた瞬間、「痛い!」と感じました。まさに、実感、痛感です。欠けた耳にさわったことにより、仏頭に対する敬愛の念が身体内部から湧き出てきたような気がします。仏頭の左耳にさわった感覚は鮮明に記憶していますし、手を通じて、自分の身体と仏像がつながったような意識を持つこともできました。見るだけでは得られない意識・認識が「触識」だともいえるでしょう。国宝レプリカは、来場者が「触識」を身につけるための最高の展示物でした。

僕がさわることを強調すると、どうしても視覚障害者とは見る代わりに触覚によって情報を得るのだと受け取られて、それだけで終わってしまいます。博物館のバリアフリー、視覚障害者対応として、さわる展示を増やすことも大切でしょう。でも、僕が重視しているのはユニバーサルの観点です。みんながさわる、誰もが楽しめる。

「さわって楽しむ体感展示」は、国民文化祭、障害者芸術祭の同時開催の意義を象徴するユニバーサルな企画だったと、僕は自負しています。

レジュメには、「バリアフリー、弱者支援との違い(視覚障害者が楽しめる→視覚以外の感覚を活用する→視覚偏重の現代社会のあり方を問い直す)」とあります。僕が民博に就職後、最初に取り組んだのは点字パンフレットの作成、広報誌の音訳版発行です。これらはバリアフリー的な事業といえます。次に、企画展の担当者となって、視覚障害者が楽しめる展示会を具体化していくプロセスで、新たな気づきがありました。

視覚以外の感覚、触覚・嗅覚・聴覚で楽しめる展示は、視覚障害者にとって親しみやすいものです。といっても、それは視覚障害者専用ではありません。日

常生活で視覚に頼って暮らしている健常者にこそ、視覚以外の感覚の可能性を知ってほしい。こんな発想からユニバーサル・ミュージアムが生まれました。ユニバーサル・ミュージアムにはゴールがなく、発展し続けることにより社会を変えていくのが理想です。

さわる展示の深化

僕の講演は雑談が多くて、いつも後半が駆け足になります。レジュメの最初の所でだいぶもたもたしたので、慌てずに、少しだけ急いで、次の話題に移ることにしましょう。「さわる」をキーワードとして、ユニバーサル・ミュージアムの実践的研究に取り組んできましたが、ここでは最新の成果、ユニークな展示の事例を報告します。2016年の7月～11月に兵庫県立美術館で、彫刻作品にさわる展示会を企画・実施しました。資料Ⅱは、この展示会を紹介した新聞記事です。

展示会の話に入る前に、日本におけるユニバーサル・ミュージアムの歴史について簡単に説明しましょう。まず、この場を借りて日本ミュージアム・マネジメント学会にお礼を申し上げます。僕はこれまでに3回、ユニバーサル・ミュージアムをテーマとする公開シンポジウムを民博で行なっています。最初が2006年、次が2011年、いちばん最近が2015年です。

2006年は米国からゲストを招聘し、国際シンポジウムを開催しました。僕にとって、大きなシンポジウムをオーガナイズするのは初めての経験です。ノウハウがわからないし、どうやって人集めをすればいいのか、不安だらけでした。先輩のアドバイスで日本ミュージアム・マネジメント学会に後援をお願いすることになり、学会の会報等にシンポジウムのチラシを入れてもらいました。これは効果大で、学会会員の方がたくさん参加申し込みをしてくれました。

同様に、2011年、2015年のシンポの際も本学会に後援をお願いしています。依頼するばかりで、何も恩返しができていないのに、今日は学会の大会にお招きいただき、なんとも心苦しいです。本学会の協力もあり、3回のシンポジウムは成功し、成果として書籍も刊行することができました。4回目のシンポジウムがいつになるのか、まだわかりませんが、2020年のオリンピック・パラリンピックに便乗して、何か企画したいなど、漠然と考えています。単純にオリパラのブームに乗っかるのではなく、「ユニバーサル」を一過性の社会現象で終わらせないためにも、「地に足の着いた」シンポを立案したいものです。

過去3回のシンポジウムの内容を振り返ってみると、ユニバーサル・ミュージアムの流れがよくわかります。2006年に最初のシンポジウムを開いた時は、まだ日本にユニバーサル・ミュージアムの概念が定着していませんでした。「誰もが楽しめる博物館」と聞いて、それを否

定する人はいませんが、具体的に「ユニバーサル」とは何なのか、明確に答えることができる人はごくわずかでした。

レジュメには「欧米の先進事例に学ぶ」と書いています。このシンポジウムでは、ニューヨークのメトロポリタン美術館の教育普及担当者（アクセス・コーディネーター）に来ていただき、米国のミュージアムにおけるソーシャル・インクルージョンの実践、障害者を対象とする各種プログラムの概要について話してもらいました。アメリカの先駆的な取り組みに刺激され、さあ日本でもこれからいっしょに頑張っていこうという雰囲気作りをするのが、初回シンポの主眼だったと思います。

それから5年が経過しました。2011年のシンポについて、レジュメでは「考古系・自然史系の博物館が運動をリード」と書いています。2011年段階では、国内のミュージアムで多様な実践をする事例が増えており、日本人のみの発表で全パネルを組むことができました。このシンポジウムでは、国内のネットワーク作りを第一の目標としました。

現在も基本的に同じ状況ですが、各館では熱心な学芸員、やる気のあるスタッフが個人的にユニバーサル・ミュージアム活動に取り組んでいます。館内で孤軍奮闘する「点」を集め、「線」にして「面」にしよう。こんなシンポの趣旨に共感し、たくさんの博物館関係者が全国から参加してくれました。本シンポの成果報告書として、2012年に『さわって楽しむ博物館—ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社）を出版しました。本書の刊行により、さわる展示や障害者対応に関心を持つ人々のゆるやかなネットワークを構築することができたかなと感じています。

自然史系・考古系の博物館では、「ユニバーサル」という言葉が使われる以前から、さわる展示の蓄積がありました。一部の自然史系博物館では、1980年代から主に子どもの来館者をターゲットとするハンズオン展示を導入し、化石や隕石、骨格標本などにさわることを推奨してきました。考古学の研究者は発掘調査で「手」を使用することが多いので、考古系の博物館でも縄文土器と弥生土器の触感を比べるなど、触察を重視する展示が開発されています。

ただし、こういったハンズオンコーナーの運営実態を調べてみると、資料保存、さわる体験の積極的な位置づけなどの面で、さまざまな問題があることがわかります。民博の「世界をさわる」コーナーの反省点でもありますが、多くのさわる展示は露出展示をするだけで、資料の取り扱いには来館者に委ねられているのです。資料の破損が頻繁なので、さわる展示にはいわゆる消耗品しか使わないというケースも珍しくありません。自由に

さわるといのはすばらしいことですが、その自由には節度が必須でしょう。節度を誰が、どのようにして示すのかが「ユニバーサル」の眼目ともいえます。2011年のシンポでは、さわる展示の現状と課題を整理することができました。

それからさらに4年が経過し、2015年に3回目のシンポジウムを開きます。今回の特徴は「美術館への広がり」です。従来のユニバーサル・ミュージアム運動は考古系・自然史系など、博物館がリードしてきました。美術館でも彫刻作品などの立体物にさわる取り組みは早くから試みられていましたが、絵画はさわるできません。絵画の展示を中心とする美術館は、「見る／見せる」鑑賞のあり方を長年追求してきました。美術館は、ユニバーサル・ミュージアムの活動に入ってくる状況があったのです。

2015年のシンポジウムでは、美術館関係でセッションを一つ作りました。美術館は視覚優位・視覚偏重の文化施設です。もちろん、視覚的に味わう美を探究するのが美術館のミッションですが、あまりに視覚に頼りすぎていると、見えなくなるもの、限界があります。二次元作品をどうやって視覚以外の感覚で鑑賞するのか。この問いかけは、単なる視覚障害者対応というレベルにとどまらず、美術館そのものの原理原則を再検討する反近代・脱近代のパラダイムシフトへとつながります。

シンポジウムではさわる図録、さわるアートカードなどを試作している美術館の実践が発表されました。このシンポジウムの報告書は、2016年に『ひとが優しい博物館—ユニバーサル・ミュージアムの新展開』（青弓社）という書籍となって出版されました。2012年の「可能性」から、2016年の「新展開」へ。近年は「ユニバーサル」を志向する新たな流れが美術館にも波及し、日本のミュージアムが確実に変化している手応えを感じています。

「無視覚流鑑賞」とは何か

以上のような全体的な流れを踏まえて、では僕が現在、どんな試行錯誤をしているのかについてご紹介しましょう。2016年に担当した兵庫県立美術館の企画展「つなぐ×つつむ×つかむ—無視覚流鑑賞の極意」の話をします。この企画展はちょっと意地悪な展覧会で、来場者は受付でアイマスクを渡され、目隠し状態で会場に入ります。

会場内にはブロンズ製の彫刻作品が三つ展示されています。来場者は順番に一つずつ作品にさわっていくのです。いきなり、目の前（手の前）に作品があるので、「自由にさわってください」と言われても、どのようにしてさわればいいのか、来場者はよくわかりません。そこ

で、音声ガイドが登場します。レジュメには「視覚障害者が彫刻作品を触察する『生の声』を音声ガイドとして用いる」と書きました。この展覧会の最大の特徴は、視覚障害者発の音声ガイドの製作です。無視覚流の音声ガイドは「広瀬でいい」よりは多少積極的で、「広瀬（視覚障害者）が自作自演する」所に意義がありました。

視覚障害者は日常的に触覚をフル活用しつつ生活しています。彫刻作品などを含め、立体物をさわって学ぶ、さわって楽しむことにも慣れていますが、でも、やみくもに僕が彫刻にさわって、その印象をつぶやいているだけでは音声ガイドにはなりません。音声ガイドの内容をブラッシュアップする過程で、美術館の学芸員とも議論を重ね、僕たちは「つなぐ」「つつむ」「つかむ」という三つのキーワードを選びました。この三つのキーワードに即して、触察を進めていくスタイルで音声ガイドを練り上げました。

一つ一つの作品について、どのようにさわれば、どんなことがわかるのか、じっくり解説しました。ですから、音声ガイドは1作品につき7分半ほどあります。7分半と聞けば、みなさんは「いくら何でも長すぎる」「広瀬はずうずうしく、べらべら喋ったのだろう」と思われるでしょう。それは半分当たっているかもしれませんが、見ることを前提とした音声ガイドと、さわることを前提とした音声ガイドはまったく違うものです。

視覚を使わずに（見ないで）さわることの難しさ、おもしろさを僕はパズルに似ていると表現します。目が見えていれば、一目瞭然、瞬時に物の全体を把握することができます。ところが、目隠しをすると一触瞭然とはいきません。全体像をとらえるまでに、相当の時間が必要です。手が触れた点の情報を前後・左右・上下に少しずつ広げていきます。手を動かすことによって、点は線、面へと展開します。これは、ピースを組み合わせてパズルを完成させるプロセスに類似しています。触察の場合、パズルを組み立てる部分にいちばん時間がかかるわけですし、ここを丁寧に解説しないと、音声ガイドは機能しません。

パズルが得意な（おもしろい）人、不得意な（難しい）人がいるように、触察の受け取り方も十人十色です。しかし、手を動かし、頭の中で作品のイメージを組み立てていく触覚パズルは、人間ならではの知的作業だといえるでしょう。アンケート結果をみると、音声ガイドは好評でした。やはり、僕自身が作品にさわりながら（パズルを組み立てながら）説明したのがよかったようです。来場者からも「ちょっと難しかったけれど、おもしろかった」という感想が多数寄せられました。こういった音声ガイドは他のミュージアムにも応用できるのではないかと

いう手応えを得て、兵庫県美での企画展を終えました。

本日の僕の講演の副題は、「多様な『from』を育む博物館」です。この10年の間に、ユニバーサル・ミュージアム、さわる展示は確実に拡大・発展してきました。ユニバーサル・ミュージアムの理念を支えるのが「from」の発想です。「つなぐ×つつむ×つかむ」の展示では、視覚障害者が音声ガイドのコンテンツを提供しています。このコンセプトは、通常のミュージアムの「常識」とは逆です。健常者、目の見える人が音声ガイドを作り、障害者、目の見えない人がその恩恵を享受する。これが従来のミュージアムにおける来館者サービスの論理です。



レジュメでは「してあげる／してもらう」という言葉を挙げています。「健常者＝してあげる」「障害者＝してもらう」という図式は、ミュージアムのみならず、近代以降の社会に流布する見識・見解・見地です。美術館においては、視覚を使う人が、視覚を使えない人に情報提供するという考え方も大事です。でも、今回の無視覚流鑑賞では、あえて美術館の「常識」を逆転させてみました。

無視覚流鑑賞は、視覚障害者の美術鑑賞を疑似体験するものではありません。視覚を使わずに、触覚を頼りとして情報を組み立てる。物にじっくりさわって、「目に見えない世界」を想像する。こんな新しい美術鑑賞を健常者に知ってもらおうのが、企画展の真の目的でした。無視覚流鑑賞は、視覚障害者専用のものではないという点で、この展覧会はユニバーサル・ミュージアムの最新事例と位置付けることができます。

企画展「つなぐ×つつむ×つかむ」において、目隠しをして、触覚に集中するというルールを徹底した点は評価できます。ここで問題なのは、作品を最後まで見せないことの是非です。会場におられるみなさんの中でも、おそらく「作品を見ないで鑑賞することの意義は理解できるが、やはり最後はどんな彫刻をさわっていたの

か、視覚的に確認したい」という意見が多いのではないのでしょうか。実際に展覧会のアンケートでも、「最後に作品を見たかった」という声が多数寄せられています。僕と美術館の学芸員も、こういった反応は予想していました。その上で、あえて「最後まで見せない」を貫いたのだから、やはり意地悪ですね。

人間の視覚は、「より多く、より速く」情報を入手することができます。パソコン、スマホの普及が示すように、現代人は便利な視覚に依拠する生活を送っています。視覚に慣れて（馴らされて）いる人々は、美術鑑賞でも「見たい」という欲求が強いわけです。触察鑑賞をした後に、作品を見てしまうと、「ああ、こうなっていたのか」と、触覚で得た情報を修正・変更するでしょう。そのような学習もあっていいとは思いますが、触文化にこだわるなら、曖昧に感じられる触覚情報をそのまま持ち帰ってほしい。作品の背後に広がる「目に見えない世界」への気づきを促すのが、無視覚流鑑賞の要諦なのです。

先のアンケートの中には、「作品を見て正解を知りたかった」というコメントも複数ありました。僕はこの「正解」という言葉に違和感を抱きます。世の中の多数派は、目で見えることを日々繰り返しています。無意識のうちに、目で見えたものが正解、目で見ないと正解は得られないと思い込んでいます。たしかに、美術鑑賞において、色や形、全体像を視覚的にとらえるのは重要です。それでは、触覚で獲得する作品の質感は正解ではないのでしょうか。

アンケートでは「彫刻のつるつる、ざらざらした手触りが印象に残った」という感想がたくさんありましたし、音声ガイドでは作品の裏面など、見落としがちな部分にしっかりさわることを奨励しています。見たものが正解ならば、さわったものも正解です。もっと哲学的に考えると、そもそも美術鑑賞に「正解」などはないともいえるでしょう。美術鑑賞のあり方に一石を投じる、「正解」を求める近代的な思惟方法に疑問を投げかけるという意味で、今回の企画展は有意義だったと思います。

さわる展示のスタイルは多様で、もちろん無視覚流鑑賞のみが正解ではありません。民博の「世界をさわる」コーナーでは、「見てさわる」「見ないでさわる」の二つのセクションを設けています。「見てさわる」では、見ること、さわることを比較してもらいます。見なければわからないこと、さわらなければわからないことの両方を体感するのが狙いです。

「見ないでさわる」では、ブラックボックスに手を入れて、触覚のみで資料を理解してもらいます。残念ながら、「見ないでさわる」セクションではまだ無視覚流の音声ガイドがないので、単純なクイズ、正解を求めるゲーム

になっています。「この資料は〇〇である」という答えがわかることよりも、答えを推理・想像するプロセスが大切なのですが、そこは十分に来館者に伝わっていないかなと感じています。兵庫県美で「つなぐ」「つつむ」「つかむ」という触察のキーワードを提示したので、民族資料などにも無視覚流を応用して、音声ガイドを提案するのが今後の僕の課題です。

以上、奈良での映像に続いて、僕自身が取り組む最新のさわる展示の実践事例を報告しました。視覚障害者（さわることを常とする人）の立場で音声ガイドを作る実験は始まったばかりです。これは、世界的にみても、きわめてユニークな事業であるのは確かでしょう。無視覚流の音声ガイドが各地のミュージアムで採用されることを期待します。

学習まんがの「三触旗」

レジュメの3番目、「触文化論に基づく『合理的配慮』」について少し解説します。本学会の大会テーマでも「地域とともに」ということが強調されていますが、「博物館での実践を他分野、広く社会に応用する」僕自身の挑戦について二つ話題提供しましょう。

僕の講演では、「聴かせる」に加え、触覚的な要素も大事にしています。民族資料や点字の教材などを回覧し、講演の参加者にさわってもらおうようにしています。幸か不幸か、本日の会場は階段教室で、参加者も多数です。さわる資料を回覧する環境としては、あまりよくないですね。物を回すと、前列の座席の人はいいのですが、後列の人がさわるところには、僕は違う話に移っています。「見せる」「聴かせる」とは異なり、「さわらせる」ためには時差が生じるので、なかなか難しいです。ここに、みなさんにさわっていただく物を一つだけ持ってきました。僕がストーリー協力者として関わった学習まんが『ルイ・ブライユ』（小学館）です。

この本は小学生対象の学習まんがですし、今日は本の宣伝をするのが目的ではありません。本の表紙の話をします。ルイ・ブライユ（1809～1852）は、点字の考案者です。大人はご存知ない方が多いかもしれませんが、このルイ・ブライユは最近、ちょっとした有名人になっています。小学4年生の国語教科書で点字、ルイ・ブライユが取り上げられているので、Yahoo!の「きつず人名検索」で、なんとブライユさんが2年連続で1位にランクされています。ちなみに、2位がAKB48、3位が織田信長ですから、ブライユさんは小学生にとって超人気者といえます。調べ学習などでの活用を想定し、各出版社が子ども向けにブライユの伝記を刊行しています。

小学館の学習まんがの企画が僕に持ち込まれたのは、2015年の秋です。僕はまんがそのものを描くことが

できないので、シナリオを作る手伝いをしました。研究者の立場で史実を検証するのが、僕の第一の役割です。それと同時に、視覚障害の当事者として、さまざまなアドバイスもしました。失明後のブライユの心境、点字に対する熱い思いなど、史料に書かれていない部分は、僕の実体験を踏まえ、一部創作しています。

点字の考案者の伝記なのだから、やはり本の表紙で点字にさわってもらおうという提案もしました。後ほど本を回覧するので、みなさんもぜひさわってみてください。表紙カバーの上部に点字で「しょーがくかんばん がくしゅー まんが じんぶつかん」(小学館版学習まんが人物館)とあります。そして、中央部に少し大きな点字で「るい ぶらいゆ」と入れました。

注目していただきたいのは、中央の右側にある四角い窓のような部分です。窓の左側が斜線、真ん中が無地、右側が点々になっています。これはフランス国旗の触図です。ほんとうは本の中身をじっくり読んでいただきたいのですが、今日は表紙のみをさらっとさわって、次の人に回してください。単純な話ですが、本が回ってきて、それを自分の指でさわって、横、後ろの人に渡す。これだけで眠気が覚めます。見る・聴くのみ講演は受動的になりがちですが、さわる要素を加えると、講演は能動的なものに変化します。ミュージアムでも受動的な見学だけでなく、能動的な触学も大事にしなければなりません。まんが本のブライユさんが、みなさんの脳を活性化させる。その能動的な雰囲気をも僕の講演の後のシンポジウムにもつなげたいと思います。

フランス国旗は青・白・赤の3色で構成されています。三色旗の成立については諸説あり、はっきりしたことはわかりません。俗説では青・白・赤はフランス革命の理念、自由・平等・友愛を象徴しているともいわれます。この説には史料裏付けはありませんが、すくなくとも世界中の人々がフランス革命から勇気と希望を得たこと、その革命のシンボルとされる三色旗に夢を託したことは間違いのないでしょう。

三色旗を触図にするに当たって、色をどう処理すべきか、僕の中で迷いがありました。青・白・赤の色があれば、小学生でも「これはフランス国旗だ」と、すぐにわかります。でも、あえて僕は色を付けませんでした。だから、表紙の触図を見て、さわって、これがフランス国旗だとわかる人は、おそらくほとんどいないでしょう。本の中には触図の説明がきちんと書かれていますが、そこを小学生が理解してくれるかどうか、あまり自信がありません。学習まんがを副読本とする先生方のサポートをお願いしたいところです。

触図に色を付けると、「青=斜線」「白=無地」「赤=点々」のように、視覚情報の触覚情報への置き換え

になってしまいます。視覚と触覚は対等なので、どちらか一方の置換にはしたくないというのが僕の思いです。自由・平等・友愛を視覚的に表現すれば青・白・赤になる。同じように革命理念の根本に立ち返って、自由・平等・友愛を触覚的に表せばどうなるのか。

表紙の触図では、僕の独断で自由・平等・友愛の触覚表現を決めました。もちろん、これが唯一の正解ではありません。理想を言えば、本の読者である小学生たちが触図にさわって、「僕なら点々をもっと粗くする」「私なら斜線ではなく、縦線や横線にする」など、あだこうだと話し合う。三触旗が子どもたちの触文化教育のサンプル、さわるセンスを磨くツールになることを願っています。これも能動的な学習ですね。

レジュメには「可触化」という僕の造語が出ています。見ることを可能とするのが「可視化」で、この言葉は辞書にも載っています。自由・平等・友愛という抽象的な理念を可視化したのが、三色旗の青・白・赤です。一方、表紙カバーの触図は「可触化」の例です。

レジュメには、「電子書籍では伝えられない『三触旗』の魅力」と書きました。昨今はデジタル化時代で、紙の本は縮小傾向です。若者は新聞や書籍を手にしなくなりましたね。僕が本を出版する際、表紙の手触りにこだわっています。今のところ、本の触覚は電子書籍では伝えることができません。こういった僕の主張に賛同してくれる出版関係者も少しずつ増えています。10年ほど前に「本の表紙に点字、触図を入れたい」と希望しても、聞き入れてくれる出版社はほとんどありませんでした。この10年の間に僕が作家になったわけではなく、相変わらず拙著は売れません。でも、「デジタル化=可視化」に抵抗する流れが生まれているのは嬉しいことです。「可触化」は、紙の本の生き残り戦略の一つになるのではないかと勝手に考えています。

余談を一つ付け加えましょう。「これを言っちゃおしまいよ」ですが、さわる表紙はインターネットの画像ではアピールできません。また、そもそも僕の本は書店の本棚の片隅に並べられます。棚の中に入ってしまうと、さわる表紙は発見されませんね。お金と時間をかけてさわる表紙を作っても、はてさて宣伝効果がどれくらいあるのか。ちょっと疑問ではあります。当面は書店で平積みになるような本を書くのが僕の目標です。

博物館発の多様な「from」

博物館における触文化の実践を他分野に応用する例として、もう一つ、被災地ツーリズムの話をしていきます。最近、僕は観光・まちづくりに触文化の発想を取り入れる活動に着手しています。2016年から福島県いわき市で「被災地ツーリズムのユニバーサル化」プロジェクト

トに参加することになりました。すでに地元の視覚障害者、肢体不自由者にも呼びかけ、スタディツアーを3回実施しています。

従来のスタディツアーは文字どおり「視察」が中心で、バスで移動、窓から被災地の様子を「見る」ものでした。僕たちの「ユニバーサル・ツーリズム」のツアーでは、できるだけバスから降りる回数を増やし、被災地の手触り、風、雰囲気などを肌で感じる体験を重視しています。「五感で味わう」というのは陳腐な表現で、人間の感覚は単純に五つに分けられるものではありません。僕たちのツアーでは、多用な感覚を用いて現地の方々と対話し、人の心、未来など、「目に見えない世界」にアプローチすることをめざしています。五感ではなく、六感を磨くのが狙いともいえるでしょうか。

2020年のオリパラが呼び水となり、ユニバーサル・ツーリズムという語が旅行業界などで頻繁に用いられるようになりました。しかし、言葉が先行していて、具体的に「ユニバーサル」が何を指すのかが曖昧です。障害者・高齢者向けのツアーを企画すれば、それが「ユニバーサル」になるのだと安易に考えている関係者も少なくありません。実際に、いわきでのスタディツアーを積み重ねることにより、「ユニバーサル」とは何なのか、しっかり検証していきたいと思っています。

レジュメの最後に「触文化の『能動性』と『身体性』が地域を活性化する」と書きました。これが本日の講演のまとめです。今日、僕の最近の取り組みを通して、さわることの特徴を述べてきました。自分で情報を取りに行く、そしてその情報を自分で広げる。これが、さわることの特徴だといえます。さらに、奈良の映像でもご覧いただいたように、さわるとは全身運動です。さわることによって、現代人が忘れかけている「能動性」「身体性」の大切さを再確認できると、僕は信じています。

触文化を普及する地道な実践事例として、九州で継続的に行われているユニバーサル・ミュージアム講座を紹介しましょう。本学会の理事でもある九州産業大学の緒方泉先生が毎年、九州地区の学芸員技術研修会を実施しておられます。僕は2015年度からこの研修会に協力し、ユニバーサル・ミュージアムの講座を担当しています。この研修会は、地域を活性化するという点で、きわめて有意義です。

2016年度は宮崎県立美術館で僕の講座が開かれました。美術館の貴重な所蔵品の中から触察用の作品をご提供いただき、当日は参加者が無視覚流鑑賞を体験しました。九州地区の学芸員が集まり、いっしょに手と体、頭を動かして作品の魅力を探る。最初は目隠しをして、おっかなびっくりの触察ですが、作品にさわることで個々人の「能動性」と「身体性」が刺激され、

参加者同士の会話も弾みました。まさに、講座は接触と触発の現場であるといえます。

ユニバーサル・ミュージアム講座は、さわる行為を媒介として、学芸員の意識改革をもたらします。こういった意識改革が蓄積されれば、地域の活性化にもつながるはずですが。博物館が展覧会、ワークショップを続けて行く狙いは、来館者の価値観・人間観・世界観を変えていくことだと思います。そのためには、まず展覧会やワークショップを企画する学芸員の意識を変えていかなければなりません。九州地区のような学芸員研修会が全国に広がることを切望します。

僕は今日、博物館が社会を変えるという話をしてきました。博物館が育ててきた文化を積極的に社会に発信しようという考え方です。そして、21世紀の博物館を変革するのが「from」の発想だといえるでしょう。僕の場合は、視覚障害というマイノリティの立場で展示を立案したり、本を書いたりしています。視覚を使わない観光を健常者にも体験してもらうユニバーサル・ツーリズムの実験にも取り組むようになりました。

これはほんの一例で、僕の講演後のシンポジウムでは、さまざまな「from」について語られることでしょう。今まで、情報の受け手とされてきたマイノリティが、自身の生き方（行き方）を自らの手で発信する。その生き方（行き方）がマジョリティにインパクトを与える。「多様性の尊重」はグローバル時代を生きる人類の課題ですが、その最前線を担うのが「文化を創造する」博物館なのではないでしょうか。マイノリティの生き方（行き方）を理解し、「from」の発想を博物館に取り入れる学芸員、研究者を育てることができるのが、日本ミュージアム・マネジメント学会なのです！

講演の最初の雑談で、障害者の鉄道利用のエピソードを取り上げました。障害者といわれる人々がごく自然に街に出て、電車に乗る。そして、博物館にも堂々とやってくる。そんな環境整備のために、これからも触文化の伝道師として精進します。本学会にもお世話になるだけではなく、マイノリティの立ち位置からミュージアム・マネジメントの研究に貢献できるように努力する所存です。ありがとうございました。

※2017年12月、拙著「目に見えない世界を歩く―「全盲」のフィールドワーク」(平凡社新書)が刊行されました。講演では言い足りなかったことを新書に盛り込んでいます。ご一読いただければ幸いです。

シンポジウム（指定討論）

「多様化する社会とミュージアム
—文化創造の原動力となる
ミュージアム—」

パネリスト：大高 幸（放送大学客員准教授）
 可児 光生（美濃加茂市民ミュージアム館長）
 山内 利秋（九州保健福祉大学准教授）
 モデレータ：江水 是仁（JIMMA理事、
 東海大学課程資格教育センター准教授）

はじめに

【江水】「多様化する社会とミュージアム—文化創造の原動力となるミュージアム—」をテーマに、本日はお忙しいところ3名の先生方にお越しいただきまして、ミュージアム・マネジメント学会の今年のテーマに基づいた内容でシンポジウムを始めてまいります。

まず、シンポジウムの趣旨説明になりますが、平成27年度から日本ミュージアム・マネジメント学会では、急激に多様化する社会の変化に対応するミュージアム・マネジメントの新しい在り方について、「多様化する社会とミュージアム」を3年間のメインテーマとして設定いたしました。

平成27年度は「組織のマネジメント」をサブテーマに、博物館法の改正や指定管理者制度におけるミュージアムの組織マネジメントについて、平成28年度は「人々とともにつくるミュージアムの文化的価値」をサブテーマに、人々とミュージアムが共有できる価値の創造、地域と共生するミュージアム・マネジメントについて、大会等を進めてまいりました。

今年度は、ミュージアム来館者の多様性、ライフスタイルの多様性、そして観光、福祉、医療、地域活性化、ミュージアムの社会的資源の高度化など、ミュージアムそのものとミュージアムのマージナルな領域を含んだ形で、ミュージアムと社会の在り方に関して、もう一度様々な方面と結びつくことで考えてみようと考えています。ミュージアムを取り巻く環境が非常に多様化している、様々なことが求められるようになってきています。このような背景をもとにして、多様化する社会におけるミュージアム・マネジメントの必要性和、その必要性が地域文化の創造、クリエイションに果たす役割につながっていくものと考えます。だからこそ、今私たちはミュージアムがあることによって、地域社会に何ができるのか、またミュージアムを取り巻くさまざまな組織と連携することによって、新たな付加価値、新しい見方を提供することができるのか、それについて考えていこうではないかということで、本シンポジウムを展開してまいります。

今日ここにお越しいただきました3人のシンポジウムパネラーの方はまさしく、この多様化する社会とどう関係を持つことによって、ミュージアムの価値を高めていくのか、

どのような活動を実際に展開していくことによって、この多様化する社会においてミュージアムはどのような役割を果たしていくのかについて研究、実践されている方々です。パネリストの方を皆様から見て左側からご紹介させていただきます。

大高幸さん、放送大学の客員准教授ですので、美しいお声を、スピーカーを通して皆さんお聞きになったことあるかと思います。ご出身は福岡で、最終学歴としてはコロンビア大学大学院博士課程で教育学の博士号をお持ちになっています。ご専門は博物館教育、美術館運営、芸術メディア論。諸外国の博物館活動のさまざまな情報とそれに基づくミュージアムの後継者、人材育成などといった事柄に関する研究事例を多くお持ちですので、今回は博物館教育や博物館教育に関する人材育成について研究するお立場から、多様化するミュージアムにおいて有意義な話題提供ができるのではないかと集まっていたきました。

そして、可児光生さん、美濃加茂市民ミュージアムの館長として博物館と利用者、ユーザー、特に学校の児童生徒さんとのかかわり合いの中で、ミュージアムの果たす役割、学校とのかかわりにおいて理論と実践をされています。可児さんは地域のミュージアムのあり方について、理論と実務の両方の面から有意義な話題提供ができるのではないかと、とお呼びいたしました。

そして山内利秋さんは、九州保健福祉大学准教授として学芸員養成課程に携わっておられます。ご専門は博物館学文化財保存で、昨年の熊本地震発生以前から資料の保存などに関しても多くの実践をされています。また高齢者や認知症の方々、来館された方々との間で、博物館資料を基にした回想法に取り組んでいます。震災関係や地域活性化に関する研究、実践されています。

お三方の立場から実践、研究されている内容に関しては、この多様化するミュージアムというものを考える一つのきっかけとして非常に大きな情報と、それから研究の視点を私たちにもたらしてくれるのではないかと、この今回のシンポジウムを進めてまいります。



多様性とコミュニケーション： スローな文化の場としての博物館

大高 幸（放送大学客員准教授）

こんにちは。今ご紹介いただきました大高幸です。本日は、日本ミュージアム・マネジメント学会のシンポジウムでお話をさせていただく機会をいただきまして、大変光栄に存じます。私は、先ほどもご紹介いただきましたように、博物館教育を研究しております。美術館における鑑賞や制作のプログラムの実践者でもあり、関連して美術館運営にかかわる仕事もして参りました。

先ほど広瀬さんが素晴らしいお話をされた後で非常に緊張しておりますけれども、本日は、私が日ごろ仕事上や日常生活で経験していることに基づいて、社会が「多様性」に満ちているということ、日本の社会で、より分かりやすくするために、博物館にできることについて、皆さんとご一緒に考えて参りたいと思います。

まず、ひょうたん（写真）です。いきなりですがけれども、これは私が育てたひょうたんです。どんなことが思い浮かびますか。本日は、私の飲み友達の広瀬さんを退屈させないために、広瀬さんには本物のひょうたんを、今、触っていただいております。発表の多様性にも、努めたいと思います。広瀬さんの十分な触察が終わられましたら、会場内にひょうたんを回覧して、皆さんの眠気を覚ましていただければと思います。

ひょうたんには、真ん中にくびれがあります。この、ひょうたんのくびれは、どんなことを思い起こさせてくれますか。



高度情報化社会における「ひょうたんのくびれ」現象

ひょうたんのくびれは、ふたつの世界をつなぐ通路が、狭くなっている部分です。では、今日の社会で、このような現象は、どういうところに見受けられるでしょう。

例えば、インターネットの浸透で、情報の受信・発信のためのメディア（媒体）が、多様になってきました。私の知り合いで、お茶のお稽古の最中にも、スマホを手放せないという人もいます。皆さんは、世に溢れる情報を、どのような仕方入手していらっしゃるでしょうか。ニュースの大半をインターネット、とりわけ、ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアで取得する若者

が増えてきています。

一方、1日24時間という、私たちの持ち時間は拡がる訳ではありません。そう考えますと、情報の入手の仕方は、多様になったというより、変わってきたといえそうです。

ひょうたんの一方で、多様な情報が存在する中、個人の時間的制約でほんの一部のメディアしか活用しないで、自分の世界観が形成されていく。そういう現象が、くびれのあるひょうたんに似ていると思います。

最近、インターネット、とりわけソーシャルメディアで情報を入手する人たちは、その情報が偏る傾向があるということが、明らかになってきました。つまり、世の中の多様性が分からなくなってきている訳です。

さらに、ご存知のように、インターネット上では、「偽ニュース」（フェイク・ニュース）が、その多くは意図的に発信され、事実と誤認されたまま、あっという間に拡散していくことも、社会問題になってきています。偽ニュースは、情報の多様性、あるいは受信・発信の仕方の多様性が増した現象の一つの側面でも考えられます。人々の入手する情報の経路が、ひょうたんのくびれのように限られている場合、偽ニュースは、より深刻な社会問題になってしまいます。

皆さんの周りにも偽ニュースがあると思いますが、偽ニュースには、例えば、2016年のアメリカ大統領選挙（11月）に関連して、ネットニュースで「ヒラリー・クリントン氏が過激派組織『イスラム国IS』に武器を売却した」とか、日本でも、熊本地震（2016年4月）の折、ツイッターで「動物園からライオンが逃げた」というようなものがあります。

偽ニュースに対応して、イギリスの公共放送局BBCは、「スロー・ニュース」に力を入れているとしています。スロー・ニュースとは、「事実の深堀りやデマの真偽を検証」し、「データ分析やニュース解説に力点を置く」報道です。その実現のため、外部専門家のネットワークを築いています。スロー・ニュースの提供には、多大なコストがかかる（日本経済新聞2017.5.2）ことは言うまでもありません。

このBBCの取り組み姿勢は、博物館と重なり合うと思いませんか。BBCのスロー・ニュース路線は、成果を上げはじめ、電子版へのアクセス数は、2016年、月間9800万人と、過去最高を記録したということです。同様に、アメリカのニューヨーク・タイムズ紙も、偽ニュースへの対抗メディアとして、購読者を増やしています。このように、情報が氾濫し、その大半を、メディアを介在して間接的に得ている今日、私たちは、信頼できるメディアを探し求めています。

多様な情報には、偽ニュースだけでなく、フィクションもあります。今では、漫画やアニメ、テレビドラマや映画は、メディアの垣根を越えて、例えば漫画が原作の映画もたくさんあり、歴史上の人物や海外の人々の生活ぶりに関する情報を、提供し続けています。私たち

は、これらの情報がフィクションであるということ、知らず知らずに忘れてしまい、実在の人物や社会的な文脈とはかけ離れた像（イメージ）を頭の中に定着させてしまうということが往々にしてあります。

このように、偽ニュースやフィクションとしての情報が溢れる今日、まず、それらの情報は、高度情報化社会では、多様な情報の一部であるということ、私たちが理解する必要があります。

こうした今日の社会において、博物館は、所蔵する実物資料や、展示、教育プログラム、文献、ウェブサイトなどを通して、資料に関する研究成果を発信する、信頼できるメディア（媒体）であると考えられます。そして、博物館の重要性は、メディアが多様化していく社会において、増していくといえるでしょう。

博物館利用の足跡をたどる

では、このことに関連して、視点を変えて、ある人の博物館利用の足跡をたどってみましょう。多様な仕方で利用されていますので、皆さんと一緒に確認していきたいと思います。

まず、東京国立博物館のウェブサイト上の「コレクション」中、「研究データベース」を検索し、その中の「古地図データベース」で、<下総国千葉付近図>や<関東絵図>を検索し、閲覧。

続いて、国立国会図書館の「デジタルコレクション」で『佐倉風土記』、『江戸砂子』や、「日本古城絵図」というデータベースで<下総佐倉城>、<総州佐倉城図>、<下総佐倉城図>などを検索し、閲覧。

次に、佐倉新町おはやし館（佐倉市）に来館し、城下町古地図の、本物ではないのですが、写真を閲覧したり、展示されている祭礼の山車人形を鑑賞。

今度は愛知県の西尾市岩瀬文庫のウェブサイト上の「古書ミュージアム」中、「蔵書・古典籍書誌データベース」で、佐倉藩の地図の所蔵を確認後、訪問して実物の地図を閲覧し、写真撮影ができなかったためにスケッチ。熱心に鑑賞されていたので、スタッフから西尾市資料館を紹介されています。

紹介された西尾市資料館を訪問し、企画展の『城絵図展』（2016年）で<下総国佐倉城図>（佐倉新町おはやし館で写真が展示されていた地図の実物）など、佐倉藩城下町及び佐倉城の詳細な地図を鑑賞し、関連刊行物を購入。後に同館ウェブサイト上の「刊行物（図書・報告書）一覧表」を検索し、再確認。

やはり外せないのが国立歴史民俗博物館（佐倉市）で、同館のウェブサイト上の「データベースれきはく」の中の「研究成果・論文目録データベース」中、「旧高田領取調帳」で、各種古文書において不明な旧村名を検索し、調査。図書室で出版物を閲覧。

そして、千葉県文書館で、下総国佐倉藩堀田家文書（佐倉厚生園所蔵）のマイクロフィルムを閲覧。

さらに、早稲田大学のデジタル・アーカイブズ「古典籍データベース」で、『江戸砂子』、『成田名所図会』、『利根川図志』などを閲覧。

さて、この人は、どういう人だと思われますか。博物館や図書館、文書館、大学などが提供する情報から、必要なものを探し求めて、学際的に入手していらっしゃいます。研究者ではないかと思う方は手を挙げてください。結構いらっしゃいますね。違うと思われる方はどう思われたのでしょうか。興味深いので、後の懇親会でぜひ聴かせてください。

これは、放送大学の学部の学生、Sさんです。既に提出・認定された卒論研究の道筋での博物館の活用を、私が調査させていただいたものの一部をご覧に入れています。卒論のテーマは、近世中後期の下総国佐倉城下における「麻賀多明神祭礼」というお祭りの運営のあり方でした。

Sさんは、古文書、地図、絵図などの史料の所在を確認して、各史料を照らし合わせて、丹念に調査・研究しています。なぜこの事例をご紹介しているかということ、こういう博物館利用の仕方をしている方が結構いらっしゃるからです。ちょっと話がそれますが、本日の私の要旨にも書いておりますように、私たちの博物館利用は、どこからが余暇・遊びで、どこからが学習・研究なのかということ、明確に区分できません。また、関心のあることを探究する際、博物館は、多数のメディアのうちの一つです。このことは、Sさんの博物館利用法にも表れています。

遊び、あるいは学習・研究活動を通して、このような仕方で博物館を利用している最たるグループが大学生です。私が担当する「博物館教育論」や「アート・マネジメント」といった科目を履修する、いくつかの大学や大学院の学生たちも、日常的に博物館を利用している人が大半です。なかでも、インターネット上での検索は、大学生の学習・研究活動で重要な位置を占めています。

Sさんは、「古典籍などのデジタル化された史料がウェブサイト上のデジタル・アーカイブズで公開されることは、タイトルのみからでは不明な詳細情報を入手できるだけでなく、拡大可能であることから、細部の研究に有益」とであると指摘しています。

先ほど、BBCがスロー・ニュースを提供することに力を入れるようになったとお話ししましたが、卒業論文は、大学生が学習・研究成果をまとめて、新しい知見、つまり、情報を発信する、いわば「スローな探究」の一大事業です。大学生は、余暇や、学習・研究活動を通して、博物館の活用法を、経験的に学んでいきます。その後の生涯に渡る探究活動や考え方に、この博物

館活用法が作用していくことになります。博物館学芸員資格課程の一連の科目を履修する大学生は、博物館の活用法が深まる典型的なグループでもあります。その意味においても、博物館学芸員資格課程は、有意義だと思えます。

インターネットやデジタルメディアが浸透している今日、私たちの探究活動において、情報入手の利便性は、飛躍的に向上してきました。それを左右するのは、ウェブサイト上での検索活動です。ところが、検索したい事柄になかなかとり着かないという声もよく耳にします。

従って、博物館が、利用しやすい検索システムを構築して、ウェブサイト上で情報を公開し、更新していくということは、博物館利用者への貢献の可能性を拡大するといえるでしょう。国立歴史民俗博物館や立命館国際平和ミュージアムなど、検索システム構築の過程などを研究紀要などで明らかにされている博物館もあり、他の博物館に有益な情報が公開されています。

また、ウェブサイト上での情報公開が、実物資料の重要性を減じてしまうということは、どの学問分野においても、決してないと考えます。Sさんも、卒論研究において、実物資料や展覧会を、博物館などでじっくり鑑賞しています。今、皆さんはひょうたんを触ってご覧になって、触察されていますが、先ほど写真で見たひょうたんと本物のひょうたん、どうでしたか。かなり違う発見があると思いませんか。うなずいている方がいらっしゃいますね。触察も重要な研究法だと思えます。

生涯学習の時代と言われて久しいですが、放送大学の学生は、学び続けることを日課にしている。現役の社会人や退職後あるいは働き続けるシニアが、大半です。今日の社会では、高等教育においても、学生と学び方の両面において、「多様性」が着実に拡大している一例といえます。

こうした、多様な大学生の「スローな探究活動」の場として、博物館は、重要な役割を果たしています。従って、大学生の余暇や探究活動を視野に入れた、博物館の情報提供に、今後、ますます期待したいと思います。

博物館：多様性を認め合うコミュニケーションと「スローな文化」の場

再び、ひょうたんに戻っていきたく思います。コミュニケーションの経路（チャンネル）が何らかの理由で狭い現象を「ひょうたんのくびれ」現象だとしたら、みなさんの周りには、どのような「ひょうたんのくびれ」がありますか。

例えば、次のような世界の間には「くびれ」がある可能性があります。

・「博物館の持つ多様な資源」と「それにアクセスでき

ない人々」

- ・「利用者の関心や課題」と「それを十分認識できない博物館」
- ・「博物館内部の部署A」と「部署B」
- ・「博物館」と「他の機関（今後のご発表でも検討されると思われますが、利用者が活用する他の博物館や図書館、公民館、保育園、幼稚園、学校、大学、病院、介護施設、老人ホーム、刑務所（海外の事例）、観光関連の事業体、行政機関、マス・メディアなど）」
- ・「日本の博物館」と「世界の博物館」

博物館は、多様な利用者の声を十分聴く、コミュニケーションのチャンネルを持っているでしょうか。また、日本の博物館は、世界の博物館界に情報を十分発信しているといえるでしょうか。

コミュニケーションは、双方向であり、その当事者を互いに変容させる過程です。そもそも、コミュニケーションは、なぜ、重要でしょうか。

この社会の多様性の相互認識には、双方向であるというコミュニケーションの質と、コミュニケーション・チャンネルの多様性という二点が要であると考えられます。そうでない場合を考えてみると分かりやすいので、極端な例を想像してみましょう。ある国では権力者が自分に都合の良い情報だけを、一方的に、一つのチャンネルだけで市民に提供し、他のチャンネルはありません。博物館は、権力者の礼賛だけをします。市民の声を聴くチャンネルは、もちろんありません。私たちが目指している社会は、そういった社会ではありません。

博物館は、利用者の疑問や課題に対応し、信頼できる研究成果を発信していくメディアであり、利用者の意見、これには例えば展示への感想や利用者自身の学習・研究成果を含みますが、そういったものを表明するメディアであり、経路（チャンネル）です。

博物館は、忙しい私たちが、正しい・当たり前だと思いついてしまっていることを立ちどまって再検討したり、今、あるいは未来のために何が重要かということをつくりだす機会を提供してくれる、まさに、「スローな文化」の場の一つだと思えます。そのために、展示や教育プログラム、ウェブサイト上のデータベースなどを利用者がどのように活用しているかについての「質」に焦点を当てた、博物館当事者による定性的な実践研究（アクション・リサーチ）の推進と、利用しやすい博物館のマネジメントのあり方についての本学会のリーダーシップに、今後ますます期待しております。また、微力ではありますが、私にもできることを実践していきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

子どもたちの博物館体験とその後 ～地域における博物館育ちの市民とは～

可児 光生 (美濃加茂市民ミュージアム館長)

私からは、美濃加茂市民ミュージアムの小学校を中心とする、学校利用の実態と振り返りの事例などを少しお話ししたいと思います。今回の大きなテーマになかなか近づける話ではないのですが、少し我慢して聞いていただきたいと思います。

簡単に美濃加茂市民ミュージアムのご紹介です。できましたのは2000年10月で、今から17年前になります。施設は5,900平米、ちょっと特徴的なのが教育センターを併設してまして、当初から学校と博物館の両者を意識したような施設として計画されています。自治体直営の博物館で、一般的な中小規模の地域総合博物館となっています。学芸員が6名います。毎年9万人前後の入館者があります。

開館までに17年間準備をしまっていました。実は途中で計画凍結に近いこともあったのですけれども、その間にいろいろ話し合う期間がありました。そういう中で、館がどういう施設を目指すのかという理念として、「自然とのかかわり」「学校とのかかわり」「市民のちから」「交流と地域」の4つを最終的には決めていきました。現在もこの4つをもとにしてやっているのですけれども、今日のお話は、特にこの中の2番目の「学校とのかかわり」に関することです。「博物館のモノを活かした、感動と深まりのある学びができる場となり、子どもが将来にわたって幅広く知的好奇心を持ち続けられるようになります」と、そうなるといいなということを願って活動しています。

この「学校とのかかわり」については、ちょうど2000年度が総合的な学習の時間の試行の年でありました。学校側の考えや要望と博物館側の希望というものがちょうど出合ったということで、ラッキーだったのではないかと思います。開館して17年経ちますけれども、現在この理念にどれだけ近づいているかというものが一つの評価だと思って取り組んでいます。



館が目指す「学校とのかかわり」とその実態調査

今日お話しする内容は学校団体利用の様子、その後、今申し上げました理念と評価、調査についてです。

実際に授業としてそれを受けた子どもたち、それから利用者の一つである教員、それから授業を受けた子どもたちが成人式を迎えた段階という、その3つを対象としながらの事例を少しお話しします。

学校利用の考え方です。美濃加茂の場合は遠足とか社会見学で訪れることは基本としてなくて、カリキュラムにもとづいた授業の教科として活用しています。事前に学芸員と担当する学習係と教員の3者が必ず打ち合わせをします。電話とかメールでもできなくはないのですけれども、必ずこのようにして顔を合わせるということを大事にしています。授業の狙いとか、事前事後の学習の必要性をここで打ち合わせをします。学校への単なるサービス機関とならないように心がけているところです。これが昨年度の内容です。一番多いのは社会科の授業で、全国的に定番となっている「古い道具と昔のくらし」とか「縄文のむらから古墳のくにへ」などです。それから生活科、理科、国語、図工、総合ということで、このように教科は多岐にわたっています。これは、各分野を扱っている総合博物館だからということが前提ですが、学校側はそれぞれの先生のもとで教育効果があるというものを選んで自由に教材化している表れではないかと思っています。

受入れ体制としましては、教員、学芸員、学習係、ボランティアの4者がチームで組む、チームティーチングという形で、それぞれ多様な立場、視点で子どもたちにかかわっています。

年間利用者は毎年1万人ほどあります。やはり一番多いのは小学校で93%。市外の子どもたちも、希望があれば受け入れており、昨年度は学校利用の24%が市外の利用でした。だんだんこの比率が高くなっていると感じています。その一つの要因としましては、かつて市内にいた先生方が異動で市外へ転勤になったときに、かつてここでやったことの手ごたえを感じながら、もう一度来館されているという事例も多いように聞いています。子どもの来館する回数としましては、6年間で11回ほどということで、かなり日常的な利用になっているのではないかと思います。博物館でバスによる送迎を行っています。今はやっていませんけれども、給食の配送なども実施していました。アウトリーチで学校へ来てほしいという話もありますけれども、やはり博物館の空気を直接吸ってほしいということで来館してもらうことを原則として進めています。

これはある学校の6年間の活動履歴です。1年生、2年生の生活科から始まり、2年、3年の図工、社会、理科など多方面にわたっているということで、この学校の子どもは小学校時代に13回博物館に来ています。もはや特別な活動ではないことがお分かりいただけます。

博物館と学校、それぞれ学びの特性というものがあ

りますが、できる限り学校ではできない博物館特有の学びのスタイルをここで実現していくことをいつもイメージしながら進めています。

生活体験館・まゆの家という昭和30年代の昔の民家を復元した建物があるのですが、そこでの活動がいろいろ有益なようでして、実際にかまどで火を焚いたり、障子を使った影絵をしたり、当時の状況に入り込むために有効な設備もいろいろあるので、使ってもらっています。

先ほどの理念の話に戻ります。「学校とのかかわり」という理念についてももう一度整理しますと、「感動と深まりのある学び」ができていくかどうかということと、将来にわたって知的好奇心を持ち続けるということ。その2つの視点で考えてみたいと思います。この2つのことについて、どこまで実現できているのか、できていないのか、もしかしたら「今日の授業楽しかったね」だけで終わっているのではないかとこともありまして、自分たちとしても何か手がかりを得るために、それから質的な変化を測るために調査を実施しています。設置者に対しては、施設はこのように目的を達成していることとか、それから地域社会に対して、測定した結果を示すことによって、博物館が持っている教育的機能を説明するための手立てにもなるというふうにも考えているところです。

最初の「感動と深まりのある学び」に関してです。子どもたちの反応やつぶやきというのは、当然現実世界ではいっぱい起きています。そういったものが聞きっぱなしになっているのではないかと考えまして、残して共有するために、このように活動の振り返りシートというのを作りました。その中に印象的だった子どもたちの姿をメモする欄を設けました。この資料はある小学校の社会の授業です。縄文土器と弥生土器の比較をしながら、縄文を見てこちらは飾りがあるから技術がある、逆に弥生土器はつるつるしているからこっちの方が技術がある、という議論をしている子どもたちの姿を担当者がメモしています。どちらも技術力という観点で議論していて、答えは一つなのですけれども、こうやって両者が議論して多様な考えがあるということをお互いに分かり合う姿を見守るということを大切に、それをシートに記録し、共有しています。

次は、利用者の一人である教員について、子どもに対する教員の意識に変容があるのかについてお話をします。「最近では少し変わってきているよね」といろいろスタッフからも聞いたり、自分も感じていました。教員に毎年書いてもらう学校活用改善シートがありますので、ここ数年のデータから声を拾ってみました。平成22年のころは「知ることができ、驚きがあった」、「理解が深まった」とか、言葉じりを取るようですけれども、知ることが先にあって驚きがある、驚きは追加のような感じでした。そして「学習の定着」という言葉が多かったです。最近では「手

に触れる」とか「目で見るといったことも大事だなということ先生方は感じていたり、それから「イメージを広げる」というような感想を述べる方も出てきています。

地域に対する見方とか、興味を持ち続けている子どもの姿をコメントしている先生が増えてきました。つまりは、当初は「知識」とか「学力向上」、「学習の定着」という感想があったのが、最近は「イメージを広げる」とか「五感で感じる体験重視を」といったことを書いてる先生が増えてるようです。それから、学校とか教室内での学習での子どもの考え方について少し「くらしをつなげる」とか「地域への広がり」などの変化を気にしている教員が増えてる感じがしています。

継続的な卒業生アンケートとその先に向けた取り組み

6年間の活動を終えた卒業生のアンケートについて、お話をします。これを始めましたのは平成17年で、平成18年度からは少し内容を変化させた現行のアンケートをやっています。昨年度まで12年間継続して実施をしています。変化を見たいということと、その蓄積を検証したいということから、同じ設問を継続しています。児童生徒は大体550名ほどです。その内容について少しお話をしたいと思います。

設問は5つありまして、1つ目が印象に残っている活動をまず選びましょう、思い出を書こうと。2つ目は行動の変化は何かありましたかということです。それから、3つ目が学習したことによってどんな力がついたのかなということ。そして4つ目が、ではこれからどんな勉強ができるのだろうかということ。最後にひとつ、というこの5つを書いてもらいます。自由記述については、「知識・技術」という面、「心・感性」というもの、それから「行動の広がり・発展」という3つのキーワードから分析を進めて、その一部について毎年冊子にして発行しています。

「印象に残っている学習と思い出」という欄についてです。これはまちまちなのですけれども、なかでも食べる体験というのはとても強烈なようでして、余りそれに引っぱられてはいけないなと思いつつ、子どもたちは正直に具体的に印象に残っている、と言っています。

設問2、これが「行動の広がり」ということです。当初と比べると2015年度では結構パーセントが上がっています。項目ごとの回答です。まずは行動の変化というか、芽生えですけれども、①番家族に学習したことを話したことがあるという子どもが約7割～8割です。それから、②番の文化の森に遊びに行ったことがあるというのが6割ぐらい。それから、④番で文化の森で聞いたことや調べたことを夏休みの自由研究に生かしたことがあるという子どもは6%ぐらいです。⑥番で文化の森での学習をきっかけとして他の博物館や美術館に出か

けたことがあるという子どもは大体9.8%ということです。当初から比べると一時は数字がちょっと右肩上がりになりました。これいいな、このままいったらどうなるかな、ということで楽しみだったのですけれども、最近はそのようになって止まっているというのが実際のところですね。実際にこの数字についてこれが高いのか低いのか、実際分からないのですけれども、自分たちとしては実態をまず押さえたいということでアンケートをやっています。

「行動の広がり」についての自由記述を見ますと、「楽しかったからもう一度行こうかな」とか「近くの博物館に行きました」というようなものがあります。

次に、「どんな力がついたかな」という設問に対して、「社会の授業を初めて楽しいと思いました」という回答は、それまではどうだったのかと思うとちょっと悩ましいですけれども、実際の子どもたちの発言です。「文化の森に行かなかったら、僕は理科、社会がこんなに楽しくありませんでした」、「社会と理科のテストの点数が上がってうれしいです」と、これも正直ですね。実際にこれは知識として、それだけのものが得られたということでもあります。最後の回答では「観察力と自分から行動する力がついたと思います」とあります。そういうことも私たちにとってとてもうれしい記述だと思います。

さらに設問4「これからの勉強」については、「理科室みたいに実験できるような場所をつくって楽しく実験したい」とか、それから「係の人に教えてもらってやる場所が多いので、自分で考えてできるしせつや、自分の知識をいかしてできるしせつを作れば、もっと楽しめると思う」とあります。この表現について考えてみると、実際に子どもたちは一方的に教えてもらっていることが多かったから、自分で考えてもっとやりたいのだな、そういう気持ちが出ているのだなということなのでしょう。それは僕たちの反省につながるのですけれども、それだけの気持ちの変化があるということとして受け止めたいです。「展示をじっくり見学して」という回答は、実際の授業ではじっくり見学できなかったということの裏返しなのかなと判断いたします。

それから、設問5の自由記述欄の「一言どうぞ」です。これはボランティアと接した経験とか、気持ちを俳句にしてみましたと「6年間、楽しい時間、ありがとう」と書いてあったり、このようにして楽しく学んでいるということは非常にうれしいと思います。また「10回も行っているとはいませんでした。文化の森の授業は、学校での授業と違い、実際に見たり行ったりできて、いつも行くのが楽しみでした」といううれしいことが載っております。

続いて、僕たちとしてはとても意識しているところを紹介します。「昔の物が大切にしていることや、貴重な体験をさせてくれる場所が私の住んでいる美濃加茂にあるのはとてもうれしいです」とか「中学でも知識を生か

していきたいです。美濃加茂にこのようなすばらしい建物があることを誇りに思います」や、「1年生のときから近くに文化の森があることが当たり前だと思っていたけど、6年生になると近くに博物館があることはすごいことなんだと思いました」という回答ですね。「この文化の森は、美濃加茂市のシンボルだと思います」と言われますと涙が出てくるくらいうれしいです。最初のころのアンケートではこういうような自由記述はなかったのですけれども、ここ最近毎年数人出てきて、一種のリップサービスなのかなと思ったのですけれども、素直にありがたく受け取っていききたいと思います。

このような答えを見ますと、やはり6年間の結果としてどこから社会とか地域に対する意識の芽生えというのも表れているのではないかなと感じます。

住んでいる地域からの観点として「シビックプライド」という言葉があります。住んでいる地域の愛着という意味として、博物館に関わる私たちもそれを意識しつつ、博物館の持続性とか地域博物館としての存在意義を示す意味でもこういった子どもたちの声に注目していきたいです。

これまでが6年間の経過ですが、その後の子どもたちはどうなったかという追跡調査のことを次にお話します。6年間フルに博物館を活用した子どもたちが成人式を迎えるのが2013年だったので、それから毎年彼らに対して調査を行っています。6年間の博物館体験が卒業してからの8年間を経て、もしかして実際に影響があったらいいな、ないかもしれないけれどもやってみようか、ということでやりました。もう一方で、卒業生もいいけれども、お母さんになった子どもが母子手帳をもらうときに、生まれてくる子どもに対して博物館を使ってほしいかほしくないかについて調査をしてみようという話もありました。それはまだ実施していません。



成人式の時の調査結果について少しお話しします。なかなか調査方法が難しく、現場が大変ごった返している中でやり方が毎年変わっていますし、サンプル数も少ないので、傾向ということでお聞きください。小学生の後どのくらい博物館に来たかと問いますと、1回もないというのが44%で、ちょっと落胆する結果も出ています。今の学業とかに影響があるかどうかということについて聞くと「ある/少しある」が15%ぐらいで、「あまりない/

ない」が3割。「ある」の中の意見で「今、歴史学科に行っているのに、少し影響している」と「学芸員の資格を取るために授業を履修しています」というものもあります。

誇りだなど思うことはありますかという質問には、「ある/少しある」約18%、「あまりない/ない」約12%という数字が出ました。どこまで信頼性があるか難しいのですけれども、これが実態です。

全体の課題に入ります。長期的視点や継続的な調査による分析は、一定の結果を得られていて、その傾向というものは何となく把握できていると思います。ただ、小学校6年間の授業は、毎年やっている内容が違いますし、学校ごとで体験内容も違うので、アンケート結果は絶対的なものではありませんし、さきほどの二十歳のアンケートについても、現状の意識や変化については当然ながらほかの要因はいっぱいあるわけですので、どこまで彼らの反応をそのまま受け入れるかというのは難しいところですよ。

最近のできごとについて少しお話しします。ここを利用したことがある20代後半の市の職員数人に話を聞いてみました。市内出身の人たちに聞くと「昔行ったところがある“懐かしい”ところだ」とか、「まじめなところだ」とか、「学校から連れて行ってもらう“勉強”するところ」だという意見がありました。何か新しいことを考えてくれと言ったら、「そんなことやってもいいのかな」というふうに逆に疑問を投げかけられました。つまり、先ほども教えられているという経験があるという子どもたちの意見がありましたけれども、小学校時代の体験の印象が余りにも強過ぎて、そのまま“学習する場”という印象が植えつけられてしまっているのではないかと考えられます。僕らがイメージしている“楽しさ”“心地よい場”という印象は彼らの中にはなくて、「小学校で行って使うところだ」というイメージが強烈過ぎたのかと、極めて衝撃的でした。むしろ小学校時代に体験のない人のほうがミュージアムの使い方について柔軟だということで、“博物館育ちの一市民”というふうに僕らは考えていたのに一体何だろう、とすごくショックを受けました。

博物館へ来館した時の授業の体験といってもいろいろあるわけですが、僕ら自身がその中身やプログラムについて作り込み過ぎているのかなど思ったりすることがあります。また、当然学校と話し合いながら綿密につくろうとするのですけれども、つくればつくほど形式的になり、子どもたちの驚きが少なくなるのではないかとというジレンマに陥っている気がします。

生涯学習施設としての多様で豊かな博物館体験に向けて

「古い道具と昔の暮らし」という授業があります。そこで体験して昔の苦勞を知り、一般的な道具の名前と使

い方も知るといった授業ですが、これをもう少し子どもたちがワクワクするような授業にできないのかなと自分は考えました。ついこの間やった授業では炭火、火鉢を使いましたが、火鉢の名前とか使い方や昔の人の苦勞話ではなく、火鉢の形の美しさとか、炭の形、色を見るとか、パチパチという炭火の音を聞かせる、においをかぐとか、それから火鉢に触ったときの温かさを感じる、モノから得られる五感を通した授業をやってみました。最後に炭火の上の灰を取り除いたところ、これがおもしろかったのです。赤い熾火を見ました子どもたちは「宝石みたい」と言ったのです。それを聞いて、僕もゾクゾクと感じたのですけれども、まさにこういった授業が果たして今までやっていたのかなということも反省しました。

それから、歴史資料について。古文書学的な話になってしまうかもしれませんが、本物でしか分からないものについての情報をもう少しちゃんと伝えていくという手立て、やり方を考える必要があると思います。歴史の授業でも対話型鑑賞はできます。豊かな博物館体験へつなげることをもう少しみんなでも考える必要があるな、と思っているところです。

このように体験の質を考え直すとともに、もう一つは学校の授業だけではない、もう少し自由で多様な博物館の利用形態というものもあわせて必要ではないかということも考えました。例えば「フォレストくらぶ」といった子どもたちの自主参加型、会員制のクラブをさらに充実したものにするを考えています。また、夏休みの社会科理科作品展で「みのかも文化の森賞」という賞を設けて、学校での評価観点で選ばれなかった作品の中から、純粋な疑問とか好奇心のあるものとか、子どもらしい発想や研究方法というものをむしろ博物館の視点で拾い上げて応援するという制度をここ数年やっています。それから、中学生ボランティアの参加もできる限り進めていますし、多様な利用体験ということで、いろいろ家族で楽しむとか、高校生の活動ももう少し取り入れるとか、大学生のイベントにかかわっていくようなことも、これからはあわせて提供していくことが大切ではないかと思っています。

もう一つは、大人も実際にここでいろいろ学び楽しんでいます、生涯学習施設ですから。大人のそういった姿を子どもたちに見せるということについてはこれまで余り意識がありませんでした。「この中は子どもだけではなく大人も楽しむところなのだよ」とその姿を意図的に見てもらい、「大人も学習する場なのだよ」ということを子どもたちに伝えることによって、将来の使いかたを考えてもらうこともあわせて必要ではないかと考えているところです。

以上で私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

「よく生きる」ために博物館が 求められていること

山内 利秋（九州保健福祉大学准教授）

『「よく生きる」ために博物館が求められていること』というタイトルにしました。「よく生きる」とは何なのだろうというお話です。

QOL、クオリティ・オブ・ライフという言葉があります。QOLを何とか向上していきましよう目指す訳で、そしてそのQOLが向上した結果・目的をウェルビーイングという言い方をしたりします。それを目指すというのは、博物館の一つの目標ではないのだろうかと思います。高齢社会であったり、子供の貧困とか学力、そして都市と地方の格差、多様化する価値観、防滅災とかですね、そうしたいろんな社会的な課題が世の中にはたくさん存在しています。もちろん博物館自体がこうした社会からの要求や、その変化に今まで可能な限りは応じてきたと思います。QOLについて考えるのはその一つでもあります。

博物館は社会からの要求にどのように応えてきたか

回想法というのが歴史民俗系の博物館ではよく取り入れられています。有名なのが愛知県北名古屋市であるとか、富山県氷見市、兵庫県西宮市といったところの名前がよく挙がってきます。でも、そういった有名どころばかりではなくて、今多くのところでこの方法が大小さまざま取り入れられています。ちなみに、宮崎県の総合博物館では展示解説の担当者が回想法が行えるように研修を受けていて、認知症を専門にしている病院が定期的に高齢者を連れてきて、参加できるようにしています。



この写真はもう10年近く前になりますが、回想法実験を認知症の専門家である同僚と、大学のある地元延岡市の内藤記念館の学芸員さんと一緒にやったところでした。このときは、博物館で持っている昭和30年代40年代の写真と、隣接する図書館が持っている同時期の住宅地図を使ってみました。この回想法をやった結果として、実際に高齢者の人たちに何か影響があるのではないかと考えました。そこで、唾液の中にアミラー

ゼという消化酵素がありますが、ある程度刺激を受けた状態になるとこのアミラーゼが活性化しますので、専用の試験紙を口に当ててその変化を見る実験をしました。結果、実際に活性化する傾向が見られました。

次はアールブリュットとかアートコミュニケーションというような、障害者に関するさまざまな機会、取り組みみたいなものが、特に美術館を中心に広がっているところを写真で紹介します。ひとつは奈良のたんぽぽの家です。アートセンター HANAというところを拠点としてさまざまな活動をやっている、就労支援にまでつなげているところですね。もうひとつは京都の亀岡にあるみずのき美術館というところですね。障害者支援施設を母体にして、アールブリュットをベースにした美術館活動をやっている、商店街の古い理容店をリノベーションした施設を美術館として活用しています。

障害者福祉施設は美術制作だけではなくて、先ほどは宮崎県総合博物館の話をしました。博物館にいろんな形でかかわり、いろんな機能のユーザーでもあるのだらうと考えています。

次の写真です。私のベースはもともと考古学で、それから資料の保存とかをやっていますが、宮崎県内の明治初期の日本家屋が解体されたときに資料をレスキューした所、襖をたくさん確保しました。歴史学、古文書を扱われる方はご存じだと思いますが、襖の下張りから古文書がたくさん出てきます。その下張り剥がしをみやざきアートセンターというところでワークショップという形でやりました。これは、会場としてお借りした施設が半開放的な構造だということもありますが、そこにはデイサービスの利用者の方々がよく来られます。デイサービスには外出のプログラムがありまして、ちょうどワークショップをやっているところに「何やっているのですか？」みたいな感じでやって来られました。一緒にやりませんかとお声がけしたところ、お年寄りがひょっこり飛び入り参加された写真です。襖の下張りまで今のお年寄りがなさったのかどうか分からないのですけれども、「これをやるといういろいろ昔のことを思い出す」という感想が出てきました。こうしたちょっとしたことでも、例えば施設のつくり方の一つとってもうまくいくものだなと思いました。

続いて富山県です。富山は獅子舞がすごく盛んで、ケーブルテレビで「おしえて！獅子舞テレビ」という番組があるほどです。今伝統芸能、民俗芸能というのは後継者がいないために、どんどんなくなっているのですけれども、ここはまだ地域コミュニティー単位で保存会が活動していて、それがいろんな事業を担っていました。富山県氷見市にあるひみ獅子舞ミュージアムは、観客席と舞台と展示施設を持っています。そこにプラスして、ここには公民館機能が併設されていました。公民館とい

うのは民俗芸能の運営では大変重要で、特にそれは公設公営の公民館ではなく自治公民館に言えます。自治公民館というのは、民俗芸能の伝承を行う場所であり、もちろん地域コミュニティーが集まる場でもあります。踊りに直接使う道具や地元伝わった古文書がずっと残されていたり、保存に関与しているところがあります。

これは和歌山です。和歌山県立博物館で仏像のレプリカ作成に非常に力を入れています。これは世界遺産の熊野古道にある牛馬童子という石製の像です。頭の色が違いますが、実は何者かによって頭部が切断されたのです。捜しても頭部が見つからなかったため、地元の方々は非常に落ち込んでしまいました。ところが、以前展示のために博物館がレプリカをつくっていたので、その型枠からおこして頭部を再現し、石像に接合したということです。頭部のオリジナルは、後々大分経ってからバス停に置かれていたということです。熊野古道という場所は温度の変化が激しいらしく、何度も頭部が外れるみたいで、なかなか大変な様子です。

現在では、3Dプリンターを使ってレプリカの仏像の作成を行っています。今日本全国のお寺の3分の2では住職がいないそうですが、そういう状態でもお寺あるいは神社というのは地域コミュニティーにとって欠かすことができない場です。そこに住民がお参りするの、極めて重要な意味を持っています。

しかしながら、やっぱり同県は盗難が後を絶たない様子で、その対策として3Dプリンターで作ったレプリカを希望したお寺に置いて本物は博物館で管理する形をとっています。数年前にうかがったときは質感もちょっといまいちだなと思ったのですが、学芸員の方がいろいろ頑張られて、最近は彩色とかが非常によくなっています。美大出身の方をお願いして制作するようになったと聞きました。こういう活動が行われる背景には、仏像が現在においても地域コミュニティーの紐帯としての役割を持っていて、これを博物館が守っていく必要性が高いと認識されているからにはほかならないと思います。

QOL の評価尺度で博物館を評価する

さて、「よく生きる事」と言いましたが、QOLとはWHOがもともと定義した言葉です。それは身体的、精神的、社会的に満足した状態で、後にスピリチュアリティも満足な状態だという言い方をしています。さらにここに挙げたのは、最近よく知られているバーク・スピルカーという人の定義です。身体的状態、心理的状态、社会的交流、経済的・職業的状态、宗教的・霊的状态、これがQOLを構成している要素、領域だといえます。宗教的とか霊的とかちょっと日本人には分かりにくいのですが、信仰というのが、先ほどの事例ではないですが、ほかの分野と結びついて有機的に

QOLを高めていくと考えるならば理解できる部分もあると思います。

そして、このQOLというものは、医療の分野等で発達した概念ですので、測定・評価研究はいろいろ行われています。

医療の分野ではEBM（エビデンス・ベースド・メディスン）—最近よく「エビデンス」という言葉が使われますが—、根拠に基づいた医療という考え方も、もっと最近ですとNBM（ナラティブ・ベースド・メディスン）物語に基づいた医療という考え方があります。EBMは、もともと治療というのはお医者さんの経験とか知識だけで判断していたところを、そうではなくてちゃんとした科学的根拠を持つと、そして患者の価値観を考えていこうよと、あくまでも患者中心で行う医療を発展させようとの目的で推進されてきました。しかし、どうやらエビデンスだけでは案外とうまくいかないということが分かったのです。そこでエビデンスだけではなくてナラティブなほう、要するに患者が語るストーリーから患者個人の背景とか人間関係を理解し、患者の抱える問題にアプローチしていくという考え方ですね、この両方をあわせていけないかとの考え方が強くなってきています。

博物館の分野において、利用者のQOLについてEBM評価で数値的に置きかえることは実は難しいところもあります。しかし、心理的な状態とか、社会的交流にかかわるQOLの主観的な幸福感という分野の評価尺度は医学とか、心理学、福祉の方面で考案されていて、それによって定量的な評価が可能となっています。評価尺度は、要するに評価してもそれが本当にいいのか悪いのかが分からず判断できないケースがありますが、尺度があることによって判断が可能になるということです。こうした方法が博物館分野で使えないものかちょっと考えています。

これは去年の北海道大会での発表の抜粋ですが、地方の中心市街地において、喫緊の社会的な課題を博物館の持っている機能を用いて解決することができないか、解決とはいかなくても、少なくとも緩和することが可能かどうかというのを、このQOLの評価手法を使って評価してみました。例えば中心市街地商店街の活性化とかにすぐにつなげられるようなものではないし、またそうすることが正しいかどうかということも考える必要がありますが、そうではなくて、<そこに生きている人たちがよく生きるためにどうするか>という視点で考えております。

そこで、場所を考えて、市民が自分の手で集められる、見つけられる、その土地にある資料、写真、地図とか、生活道具類みたいなものに対して解釈を加えたりとか、あるいは空襲とかをテーマにしました。今そうではないと言ったばかりですが、これはまちづくりの中でも

応用可能な方法です。実際に行っているところも多いと思います。こうした方法が、特に高齢化が進展している地方で介護とか認知症の予防にどんな効果があるのだろうかと考えております。今日はあげられませんが、子育てでストレスが蓄積している母親が音楽活動を実施したらどんな変化があるのか、などもテーマにしています。

ここで使っていたのが「高齢者向け生きがい感スケール」という、生きがいをどう評価するのかという評価尺度です。16の指標の評価があって、言ってみればアンケートではありますが、4つの因子「生活充実感」「自己実現・意欲」「存在感」「希望・期待感」を操作的に定義しています。博物館という性格を加味して、例えば展示を見てどうなのかという部分をちょっと加えて、影響がない程度の文言を変えたりしました。この4つのファクターの中にそれぞれ合計16の因子があります。それを先ほどの展示を見てもらったり、参加してもらったりして測ってみました。結果としては、ファクター4「希望・期待感」とファクター1「生活充実感」といった因子が高いです。結果の詳細を見てみると、「展示を見て私には心のよりどころ、励みとするものがあるのだと思出した」とか、「展示を見て、世の中がどうなっていくのか、もっと見ていきたいと思った」といった「希望・期待感」に当たる指標が高いのが分かりました。すなわちこれは、企画が高齢者の生活の質であるとか、生きる希望というものに強く影響を与えているということを意味しています。これだけだと、やはり先ほど言ったようにナラティブな評価というのはありません。しかし、むしろナラティブな評価というのは博物館が本来得意としているところなのです。

そこで常連の来場者であるお年寄りにインタビューしてみました。そうすると、会場で手伝いをしたり、他の来場者に経験を話すということが「自分の死に花を咲かせたと思った」とおっしゃってくれました。このように自分の役割を大変肯定的に捉えられているのです。これは明らかな結果が裏づけられました。

もう一つ、ウォン・ベーカーという人が1980年代に開発した、今全国の病院で普及しているスケールがあります。フェイススケールと言いますが、痛み（疼痛）の評価に使うものです。活動体験の前と後でどういった変化があるのかという感情の測定、気分評価にも有効なスケールです。ちょっとアメコミみたいな顔のイラストですけれども、「あなたの今の痛みはどうか？」といったら「今これです」と指差しで答えます。

これはインターネットで「wongbakerFACES.org」と検索すると確認できますが、研究用とか病院用とか、目的によって自由に使えるようになっています。配点は評価の0から10と逆転させているので、集計時には得点が逆転します。

この町は空襲を実際に体験していますので、その体験を語っていただきました。語る前に空襲そのものにかかわる展示を見ていただいて、語る前と後でどういった気分の変化があったのかを測ってみました。年齢80歳で男性4名、女性4名と人数は少ないようですが、実は全員小学校の同級生で、逆にこの条件でなかなか8名というのはそろわないのではないかと思います。語る前は、先ほどのスケールの数字で4という方1人、6という方が6人、あと8という気分がいい人は1人しかいなかったのです。

では、語った後はどうなったかという、上がった方もいましたが、下がった方もいました。下がった方は、直前にNHKで放映された沖縄戦のドキュメントをご覧になっていた事が影響されていて「我々の体験というのは本当に後の人たちは分かってくれるだろうか」ということを会話の中でも話されていて、自分たちのことを非常に悲観的に考えられているようでした。そうなられた方というのは、気分がどんどん下がっているのだということが分かりました。

スケールを使って評価を行いました。問題はこうした活動をどれくらいきちんとフィードバックできているのかです。やっぱりそこそこ大変です。回想法でもきちんと評価スケールを使ってやっているのは有名な北名古屋とか、富山の氷見とか限られているところです。

被災時の博物館、学芸員のあり方とは

さて去年、熊本地震がありました。宮崎のほうでも一部震度5弱ぐらいあったのですが、そのときに地震で被災した熊本県内の博物館とか図書館の中には、文化は災害に対して何ができるのだろうかという焦りとか、葛藤とかを持たれていた学芸員の方が結構多くいらっしゃったというお話を伺いました。そうした中でも、被害が大きかったところでも早期に再オープンしようとか、あるいは避難所に向いてアウトリーチ活動をしようとか、そうした取り組みは複数存在しています。

学芸員の方はそうした活動を、今こんなにみんなが大変な時期に本当にやっているのだろうかとか自問されながら活動されていたみたいですが、避難所のストレスというのが大変鬱積していたようで、やったことに対する被災者からの支持がすごく高かったというお話を聞いています。これは、博物館だけでなく、現地では幾つかの図書館もやっています。レジユメのほうには、多くの指定管理館と書いていますけれども、必ずしも指定管理館ばかりではなかったですね。ただ被害が大きい地域で早期再開が可能だった理由の一つとして、博物館と図書館の両方に指定管理館が幾つか含まれている点は挙げられます。要するに、普通は行政の担当者の方々は大規模災害時には避難所対応に回ってしまうわけで

す。熊本市さんなどはそうでした。そうすると博物館どころじゃないということになるのですが、一方で何とか博物館を開けて、文化の役割というものに疑問、葛藤を持ちながら何とか活動することができた館があります。こうしたところを見ていると災害時の博物館にも資料レスキューだけではなくていろんな相応の役割というものがある、それは人々が「よく生きる」ということに大変関係しているのではないかなと思います。

学芸職員は、そうした避難所対応のほうだけでなく、本来の職務に専念できるということで、この役割とか使命を恐らく再確認できていたのではないかなと思います。

ただ、こういう災害のときの博物館の役割とか利用者の役割がどの程度あったのかということ客観的に評価するのは難しいと思いますし、博物館単独で行うのはやっぱり難しいでしょう。恐らく専門の人たちと一緒に考えるということが必要になってくると思います。

ちょっと話変わりますが、博物館施設の機能縮小や常勤専門職員数の削減や兼務化が常態化していく傾向が強くなっています。今のところはまだ、博物館数そのものは増加している状況にありますが、今後変わってくるのだらうと思うのです。危惧しているのは博物館の数も専門職員の数もともと少ない地方と、減らされても機能と人員をまだ確保できる都市部とでは博物館の偏在、要するに教育そのものが平等のサービスとして受けられるのか。偏在化が顕著になり、地方と都会とで市民の学習機会の地域間格差が大きく拡大してしまうのではないかと、地方に住んでいて強く感じています。

博物館でもIoT化というのは今後進んでいくのでしょうけれども、資料保存や教育活動のことを考えてみたら、地方のほうを先に進めるべきではないかなと思います。高齢社会をはじめとしていろんな課題というのはもう都市でも起こっていますけれども、やはり地方のほうが行っています。生涯学習分野というのが医療とか福祉の分野とともにいろんな課題に対して対処していけるのだったら、このQOLの向上とウェルビーイング、これを目的として、博物館機能の再デザインというものも行われるのではないかなとも考えております。

先ほどの大高さんが話された知識基盤社会ですね、リテラシーという問題につながってくる。そうしたもののやインクルーシブ社会の構築であるとか、博物館のニーズというのはより拡張していく可能性が今後あるのだらうかなと思います。

最近学芸員の存在・役割とか、博物館周辺に対して閣僚からの発言がありました。発言には大きな誤解があるのは分かりますが、一方で世間から博物館に求められている役割の変化が露呈した結果とも受け止められるのではないかなとも受け止められます。「よく生きる」

を博物館の文脈において考えていくのは、博物館が消費社会の中でコンテンツ化されてしまうことに対して、さまざまなサステナブルなアプローチが存在するのだということを示唆するものでもあると考えております。

以上です。

【パネリスト同士の質疑応答】

【江水】 どうもありがとうございました。

それでは、パネリスト間での質疑応答を行いたいと思います。大変有意義で、そしてこのシンポジウムの内容にふさわしい様々な内容だったと思いますので、まずは、大高さんがどなたに対してどのようなことをお聞きしたいのか、次に可児さん、山内さんという順番で質問をしていきたいと思います。まずは大高さんからお願いいたします。

【大高】 非常に実り多いシンポジウムで少し消化するのが大変なのですが、美濃加茂市民ミュージアムにおける学習評価については、私も素晴らしいと思います。これまで注目してきました。とりわけ成人式を迎えた方々が過去を振り返ってどう思っているかということに関する調査は、なかなかできないのですが、博物館に関する考え方がその後の経験やいろんなことが作用して長期的に変わっていくということを考えると、大変意義深い調査だと思います。

先ほど、「行動の広がり」についても長年調査をされていて、例えば家族に学習体験を話したことがある子どもの割合についてお話がありましたが、パーセントが上がっている時点が非常に興味深いです。恐らくその要因はさまざまあると考えられますが、どういったことだと思っていच्छいますか。このことは多分ほかの博物館にも大変有効なヒントになるのではないかなと思います。よろしくお祈いします。

【可児】 それは、僕も知りたいことなのです。夏の自由研究に関する声かけがあったり、博物館でやった社会の授業で何か子どもたちのきっかけになるようなこちらからの働きかけがあったとか、そういうものがあるのかなと思ったりします。また、「これが分からなければ、あそこの館に行ったらいいよ」と話したりしているのが少し影響している気はします。スタッフ全体でそういうことを共有しているということもあると思います。絶えずこの設問を意識して行動しているわけではありませんが、全体にそういう空気が流れているという感じはしております。

【江水】 ありがとうございます。それでは、引き続き今度は可児さんからお願いいたします。



【可児】 私からは、山内さんにご質問です。先ほど氷見市の例をおっしゃっていましたが、博物館は生涯学習施設で、ほかに社会の公民館とか、図書館とかたくさんありますが、美濃加茂のことで言いますと公民館がなくなってしまっていて、交流センターというもう全て教育機関でなくなっているという実態があります。氷見市の公民館と連携しながら何かお祭り、獅子舞などをやる場合のかかわり方について何かありましたら教えてください。

【山内】 氷見を見学してみて興味深いと思ったのは、公民館の地域コミュニティ活動と伝統芸能の一体化が強いという点で、それが非常によく分かりました。ひみ獅子舞ミュージアムは観光振興のお金がついています。だから、観光客に対して獅子舞文化を見せるというような形でつくられた様子ですが、むしろそれよりも何とか自分たちの伝統を残していこうとする土地の方々の意欲、意識の高揚にかかわっているところが印象にのこりました。あとは、それとは別に氷見市立博物館では回想法を積極的にやっています。

それと、一般的に公民館は博物館的な機能を持つ所が地方では結構多いなと。公民館では結構展示活動をやっているのですよね。農作物をつくってそれを秋に展示するとか、住民主体でそうしたものをやっていく傾向は強いなと思います。

【江水】 ありがとうございます。

それでは、今度は山内さんからお願いします。

【山内】 では、お返しですが、可児さんのところの事例で大変気になるのは、学校と継続的に活動する際の教員の異動についてです。多くのところに聞いてみると、最初はやる気のある先生だったけれども異動して変わってしまったと。次に来た先生と一生懸命やって、3年ぐらいで何とかやる気になってくれたら、また異動になってしまったなどという話をよく聞きます。かつては、例えば歴史の先生であったり、理科の先生、美術の先生というのは地域の文化をつくっていくことがあったと思うのです。その先生方を核にして活動に参加する

子どもたち、あるいは大人がいたと思うのですけれども、そうした人たちをつなげる活動が今やもうできなくなってしまっているということの原因は、結構先生の異動が大きいのかなと思うのです。

ところが、美濃加茂の事例を見ていると継続的に活動できていて、非常にすぐれているなど。もしかしたら、先生の異動もあるのだけれども、一方では例えば指導主事の方がかなりみんなをうまく取り込んでいるのかとも思いました。あとは異動された先生方が利用されているみたいなことがあるとお聞きしましたが、ちょっとその辺教えてください。

【可児】 美濃加茂の活動は当初は教育委員会の所管だったので、教育長自らがかなりリーダーシップをとって今のかたちをつくってききましたから、そういうことが前提にあるのだと思います。教員の意識については先ほど少し話しましたが、市内から市外へ転出した先生がそこがかつての子どもたちの様子を思い出し、その手ごたえがどこか心に残っていて、もう一回やってみたくて思われているようです。市外に出ていくことによって、当然バス代などの費用がかかりますし、時間もかかりますけれども、それでもやっていきたいという方が一定数おられるわけです。その先生がまた異動されても、その学校には効果的な利用法というものや考え方が残っていて、また美濃加茂に行ってみようかという話が脈々と引き継がれているという感じがします。

【江水】 ありがとうございます。

【全体のまとめ】

【江水】 それでは、最後に私から全体のまとめとして感じたことを話して終わりたいと思います。

まずは、ミュージアムというのはまさしく今回のタイトルにあるように多様化した社会にどう対応していくのか、そのために今一生懸命様々な活動を模索している状況の一つの過程が見えてきたかなと思っております。

ただ、1つ確実に言えるのは博物館法なり、社会教育法なり、あるいは教育基本法という考え方からしてみれば、「一体ミュージアムというのは何をすべきなのか」という大まかな枠は全くおれていないと思います。今私たちが生きているこの時代において、科学・技術は私たちにどのようなメリットとデメリットをもたらすとか、ソーシャルインクルージョンとして、多種多様な人々に対してどう配慮していくのか、それは私たち学芸員あるいはミュージアムを支える側の人間がどう社会を理解し、適応するためにどう変容していくのか、そこさえしっかりできていれば、多様な活動としてミュージアムを支える人が出てくる、と私は聞いていて思いました。

もう一つ思ったのは、これはこじつけなのですけども、世界に向けて日本の状況を発信することで、各国の方々とも意見を交流し合いながら世界規模で話を進めていくというのも非常に重要なのかなと思いました。

国内の話というのは国内で終始してしまって終わりというのでは本当にもったいないと思います。世界の中で、日本の特殊な事例あるいは共通事例としてどのようなものがあるのか、こういったこともぜひこの2019年のICOM京都大会に向けてひとつ我々学芸員あるいはこういった学会サイドからも何かしら世界に向けてアピールすることができる、またいろいろな情報交換なり、議論が深まるのではないかなと思いました。

改めて本日ご登壇いただいた3名の方に皆様の大きな拍手をお願いいたします。

学会賞受賞記念講演

動物園におけるミュージアム マネジメントの実践

牧 慎一郎（大阪市天王寺動物園長）



天王寺動物園長の牧です。おはようございます。朝イチからこんなに多くの方に集まっていたいただいて本当にありがとうございます。光栄なことに学会賞をいただきましたので、30分弱くらいお話を差し上げようと思いますので、よろしくお願いたします。

いつも私は講演をするときは自己紹介から入ります。あまりに怪しいキャリアなものですから、まず何者かということをお話しする必要があります。最近では動物園長というわかりやすい肩書きがつかいましたが、この肩書きがつく前は動物園とは全然関係ない仕事をしておりまして、人前で動物園の話をする際には、「趣味でいろいろ動物園を回ったりして、いろんなことやってるんですよ」という話をよくしておりました。

私の出身は大阪で、大学院を修了した後、科学技術庁という役所に就職しました。その後、科学技術庁が文部省に吸収合併されて文部科学省という役所になりまして、科学技術や宇宙などの政策を仕事としておりました。

中央省庁では20年弱仕事をしました。大体1年から2年で異動していましたが、環境庁に行ったり、原子力安全・保安院に行ったり、内閣府に行ったり、出向が多かったですね。福島の事故の後はいきなり県庁の応援のために福島市に送り込まれたり、事故の後始末のために保安院や原子力規制庁に送り込まれたり、色々なことをしました。

動物園マニアとしての活動で一番有名になったのが「TVチャンピオン」という番組への出演です。2006年ですから、もう11年前の話ですが、この番組で「動物園王選手権」と銘打った、動物園マニアの選手権がありました。5人のマニアが集められて、クイズやゲームを行いました。第1ラウンドはスタジオでクイズ。旭山動物園でロケをしたのが第2ラウンドです。第3ラウンドが決勝で、体育館に集められて早押しクイズをやって

優勝しました。優勝者だけが行けるテレビ東京のスタジオにも行くことができました。

動物園マニアの活動をやっていると、もっといろいろ勉強したいと思うようになりました。もともと私は、学生時代は生物学が専攻だったのですが、生態学や分類学といった動物園っぽい生物学というのは全然勉強していなかったもので、そういう分野の専門書を読んだりもしました。動物園のエピソード本を読んだり、日本の動物文化として動物見世物とか動物絵画とかいろいろおもしろいものがあることが分かってきて、片っ端から読んでいました。

個人的に勉強してきたことの中には「博物館学」もあります。動物園について勉強していると、動物園が博物館の一種だということが出てきますので、ミュージアム関係の本も色々読んでみました。パブリックセンターの運営を勉強してみたり、観光について勉強してみたりと色々やりました。そんな勉強をしながら、いつかは動物園にかかわる仕事をしてみたいと密かに思っていました。

文部科学省では社会教育課に博物館関係の仕事があり、博物館担当の企画官のポストがあります。このポスト、10年くらい前までは交流人事のような形で3代続けて旧科学技術庁の先輩が座っていました。このままいけば、何年か後には私が座るに違いないと密かに思っていたのですが、ある時期から旧文部省の人に差し替わって、それ以降旧文部省のポストになってしまいました。これでは、文科省の中で動物園に関わる仕事をするのは、なかなかチャンスがないなど。

一方で、私自身は動物園の経営に対する関心がどんどん強まっていました。一番大きかったのは、私が市民ZOOネットワークというNPOの代表をやっていた頃、横浜市と名古屋市で動物園について検討する有識者の会議ができて、そこに市民団体の代表として出てくれとなったことです。横浜の有識者会議では「経営強化部会長」という役割もいただきました。横浜には市立の動物園が3つ（ズーラシア、金沢動物園、野毛山動物園）があり、当時はズーラシアが外郭団体への管理委託、金沢と野毛山が市役所直営だったのですが、有識者会議ではそれらを経営統合すべきという勧告を書きました。その結果、実際には3年後ぐらいに経営統合が実現しました。こうしてミュージアムのマネジメント、特に公立動物園のマネジメントに関心を持ち出したのですが、ちょうどその頃に日本ミュージアム・マネージメント学会（JMMA）に出会って、勉強がてら参加しはじめて、横浜や名古屋での経験などを発表したりしていました。JMMAでの発表は、大体2年に1回くらいでやっていて、経営学者のまねごとみたいなことをやっていました。

このJMMAでのご縁から、雑誌『ミュゼ』で公立動物園経営についての連載記事を書かせていただいたり、博物館学の教科書の動物園部門を書かせていただいたり、真面目な活動もちよこちょこやっておりました。

動物園マニアの役人から

大阪市動物園改革担当部長へ

平成25年12月のこと、大阪市の市長が橋下さんだった頃です。橋下市長の頃から大阪市の様々なポストで公募が行われるようになりました。皆さんも大阪市での校長の公募とか区長の公募とかについてニュースなどで聞かれたことがあるのではないのでしょうか。その大阪市の「動物園改革担当部長」というポストを公募することを発表しました。このことは、私自身はマニア仲間がフェイスブックで話題にしているところから知りました。大阪市が公募について発表した際、橋下市長が動物園をテーマパークにするというようなことを言っていて、動物園マニアの皆さんが「天王寺動物園はどうなってしまうだろう」と心配していたのです。

大阪で何かあったのかと大阪市のホームページを見にいってみると動物園改革担当部長の募集要項が出ていて、その仕事は、サービス改善、企画・広報の充実、将来計画、将来の経営のあり方を検討することだと。これを見て、私の仕事だと思いました。私がやりたかった仕事そのままなのです。さらに地元の大阪です。西洋のことわざで、幸運の女神は前髪しかないというのがあります。幸運の女神が飛んできたときにちゃんとつかまえなさいと。通り過ぎてからつかまえようとしても後ろ髪がないから、つかめずに過ぎて行ってしまう。これはもう飛んできたときにチャレンジするしかない、ということで公募に応募をしまして、ご縁があって合格になりました。

こういう転職の経緯ですので、決して天下りではありません。平成26年の6月末で文科省を退職し、7月から大阪市の任期付職員になりました。今も任期付の立場です。

動物園にやってきた当時は、園長ではありませんでした。天王寺動物園の園長は歴代ずっと獣医が就いていたのですが、ちょうどこの年在籍していた園長が定年退職の年齢となり、大阪市の中で後任としてちょうどいい年齢の獣医がいなかったみたいですね。そこで、園長のポストをスクラップして、新たに動物園改革担当部長というポストがつくられることになりました。私が着任した当初は、動物園のラインマネジャーの仕事は公園事務所の所長がやることになっていて、動物園改革担当部長は動物園在勤のスタッフ職という位置づけでした。ただ、実際には動物園の顔として報道対応などをすることも多く、事実上園長みたいな仕事をしていたので、翌春からは「園長」というラインマネジャー

の仕事も兼務させてもらうことになりました。

動物園のミュージアム・マネージメント

この会場で、大阪の天王寺動物園に行かれたことのある方はどれくらいいらっしゃいますか?さすがJMMA。東京でこの質問をして、これだけ比率が高いのはすごいです。

当園は100年ほど前に設置された歴史ある動物園です。街のど真ん中にこんな大きな動物園があるところはなかなかありません。動物園の西側の隣には、通天閣で有名な新世界という繁華街があります。昔はガラが悪かったのですが、最近は大分クリーンになってきました。動物園の東側に出るとターミナル駅である天王寺駅があり、この辺りにもぎやかなところ。交通の便はいいけれども、動物を飼う場所としてはちょっと騒がしすぎる立地です。

私が来る前の動物園の状況を分かりやすく示す評価指標は入園者数です。入園者数はジリジリと右肩下がり、平成に入ってから一番最低の数字を記録したのが、私が来る直前の平成25年度の116万人。これでも100万人を越える集客を実現しているのですが、以前と比べて減っていることが問題となっていました。

私が来る前のことですが、動物園と市役所本庁とでチームがつくられて、問題点を洗い出して、利用者目線が足りないなど、もろもろの分析をしていました。ZOO21計画という平成7年につくられた整備計画もリセットする必要がある。サービスの改善も必要。そのようなもろもろを改革する必要があるということで、動物園改革担当部長のポストがつくられたようです。

私が改革担当部長に着任してからすぐの時期に、橋下市長に対して、これからやっていくことについて説明したことがあります。中長期の計画づくり、目の前の改善、根本的な経営形態の検討の3つが軸で、まずは目の前の改善と中長期計画とを進めていくとお話しました。

私自身はJMMAとかかわり出してから10年くらい経つのですが、動物園に勤める前から、公立動物園の経営をどうすればもっとうまくできるのかをずっと考えていました。そういう考察を何度か学会発表させていただきました。これは去年の発表資料そのままなのですが、動物園とは何かという問題について、この場合はミュージアム・マネージメントの場ですから、動物園はミュージアムだと言って通じるのですが、一般的にはミュージアムだという話がなかなか通じない。動物園とは、公園であり、集客施設であり、野生動物の保護施設という見方をする人もいます。動物園というところは実に多義的です。

当園は公園部局ですから、ミュージアム的な話をして

もなかなか行政内で通じないというしんどい問題もあります。お客様がほとんどミュージアムと思っていませんし、もちろん行政も議会も。ミュージアム的な価値観を実現しようとするときに、お客様や行政、議会などの理解をどう得ていくかが大変だなと思っています。



これは以前のJMMA大会で発表したときの資料ですが、行政と公立動物園とお客さんとの関係を一般化して、お金の流れを中心に図にしたものです。動物園はお客さんから入場料を得て商売していますが、当然それだけでは足りませんので、行政から税金を投入して成り立っています。このように、税金の部分と受益者負担の入場料の部分との両方により運営していくというのが公立動物園のスタイルです。税金投入を正当化しようと思うと、納税者の皆さんに「動物園に税金を投入してもいいよね」と思ってもらわないといけません。この点への市民からの行政に対する評価が非常にクリティカルだろうと常々考えております。ところが、こういう構造の中だと、行政が動物園なんて娯楽施設でええやんと、市民の皆さんからも動物園なんて娯楽施設でええやんと言われてしまい、両側から挟まれてなかなかミュージアムにならないというのが動物園の構造的な問題だと考えています。

また、これは一昨年のJMMAでの発表資料ですが、公立動物園の経営面での課題を考えると、ミッションが曖昧だったり、経営資源の確保に苦しんでいたり、硬直的な運営体制とかもろもろ問題があるよねといったことを、大阪に限らず一般的な視点で考えておりました。

次の100年に向けた「101計画」の策定

さて、動物園に着任してから何を実施したかという話に移りたいと思います。

まずはミッションです。動物園のミッションについては、ZOO21計画に代わる新しい計画を策定することになっていましたので、ここでしっかり位置づけることを目指しました。具体的には、まず基本構想をつくり、それを踏まえて中長期の園全体の運営の基本計画として「天王寺動物園101計画」を策定しました。

基本構想を定めるに当たって特に気をつかったのはレジャー的な要素の位置づけです。多くのお客様が求めるレジャーの機能とミュージアム的な社会教育機能をどうバランスするか、というのが大きな課題でした。

101計画の策定自体は去年（平成28年）の10月ですが、プロセスとしては、平成26年度から27年度にかけて、有識者の意見を聞いたり、一般の人の考えを取り込むような仕掛けを入れたりして、徐々に形作ってきて、やっと去年で上がったというものです。

これは去年のJMMAで発表した内容ですけれども、基本構想では、上位の「使命」と使命に基づく「機能」との2階層に分けて書きました。使命の中では、お客様に楽しんでもらいながら生物多様性等に対する気づきを与えることを使命として位置づけた上で、使命に基づいて実施することとしては、多くの人々が求める近距離レジャーに対応しながら、レジャー目的のユーザーに対してもメッセージを発信していくことで社会教育的な機能を満たしていくことにしました。これによって、近距離レジャー機能と社会教育機能は相成り立つという説明にしたのです。

私が市役所内部で説明するときは、「動物園は楽しくなきゃあきません。でも、楽しいだけだったらあきません。」といった感じで説明しています。楽しいだけだったらただの見世物です。公立動物園である以上は、見世物を超えて、教育などの社会的に大事なことをやっていくべきと言っています。

さて、平成28年10月に101計画が完成しました。101計画とは101年目につくった計画だからです。また、101は響きや文字面がかわいいな、キャッチーだなと。101匹ワンちゃんというのがありますよね。もちろん、かわいいだけでは行政の計画の名前にならないので、ひねり出したのが「101年目というのは次の100年のスタートなのです」という言葉。この計画では、ハード面からソフト面まで、先ほどのバランスの問題なんかもいろいろと書き込んでいきました。

101計画の構成要素を見ていくと、4つの計画から成り立っています。活性化計画、機能向上計画、施設整備計画、経営計画と4つの構造になっています。活性化計画というのは楽しい系の内容で、おもしろいこと、楽しいこと、にぎやかにすること、魅力をつくることです。この中には、JMMAでもよく議論されますけれども、外部や社会との連携に関する内容も忍び込ませてあります。

機能向上計画のパートはまじめ系の内容ですね。例えば社会教育とか調査研究です。飼育管理のパートはミュージアムでいうところのコレクションのマネジメントに当たるのかなと思いつながりながら書いておりました。

これらの内容をなんとかまとめて、市役所内の決裁を取れて、動物園のミッションを位置づけるところまでは

何とかやれたのかなと思っています。

次に、経営資源の確保について。これは他の公立のミュージアムでも同じような状況のところがあると思いますが、役所が運営しているところは厳しい自治体財政のもと予算・人員が削られ、それで活力がなくなって、おかげでまたお客様も減ってしまって、ぐるぐるマイナスのスパイラルに落ち込むということがよくあります。天王寺動物園も明らかにそういう感じになっていました。

では、それをどう変えるかという、正攻法でいくしかありません。お客様から評価を得ること。これはやっぱりお客さんを増やすしかないのです。お客さんを増やすことができれば、行政の中でも発言権が得られます。とりあえずそれを頑張る。頑張ることによいスパイラルを起こそうというのが、私がこの動物園に携わるときに考えていたことです。

市役所の中でプレゼンスを示して予算を取ってくることも重要です。大阪市では市長裁定で配分される「重点予算」というのがあり、市長の支持も得られて、ここ2、3年は重点予算である程度のお金を確保できました。

魅力向上に向けては色々な取り組みをしました。いろんなイベントをやりましたし、新企画もいろいろ考えてもらいました。ウェブを使った情報発信にも力を入れました。メディアからの取材を積極的に受け入れて記事や番組にしてもらうことも増えました。それから、当園はまだまだですけども、園内のパネルによる情報発信も今後増やしていきたいと思っています。

仕掛けたイベントのうち、最も当たった企画がナイトZOOです。これを実施するためには照明の設置が必要なので、まずは重点予算として整備費用を確保しました。整備工事を何とか間に合わせて、一昨年初めてのナイトZOOを開催することができました。初年度は9日間開催して13万人もの来園者がありました。お客様が来過ぎて、しっちゃかめっちゃかになりました。開催が9日間連続だったので職員一同フル回転。私自身もちろん9日間連続で勤務して、なんとか無事に終わることができました。あまりに大変なので、次の年度からは土日毎の分散型の日程に変更しました。ナイトZOOは今後も毎年恒例行事にしていきたいと思っています。

また、秋のナイトZOOも開催してみました。最近ではハロウィンが定着してきているので、ハロウィンナイトZOOとして開催したのですが、子どもを仮装させて来たご家族もたくさんいらして、これはなかなかいい企画になりそうです。こちらも来年以降も実施していきたいと思っています。そのハロウィンナイトの際、「園長を探せ」という子供向けの企画を開催しました。私

が仮装して園内をウロウロしていて、私を見つけた子供さんから「トリック・オア・トリート」と声をかけていただくと、お菓子を差し上げるという企画です。昨年実施したときは、配るお菓子も森永製菓さんなどのスポンサーに出していただき、園としては一切お金をかけずにやりました。普段から、園長たるものは何でもやらなアカン、と言っているのですが、このときはメイクを勉強している専門学校の学生さんとジョイントで、これまたお金をかけずに私の顔に虎のメイクをしてもらいました。

園内の改善については、ポロボロの手すりなどがたくさんありましたので、集中的に人とお金を投入して美装化に取り組みました。

ユニフォームの話をししましょう。当園では、以前は動物園独自のユニフォームがなく、大阪市全体で使っている青くてダサイ作業服をユニフォームにしていたのです。このことを市長に言ったところ、新ユニフォームを作ることに強く賛同いただきました。市長の支持を追い風にして、そのまま予算を確保することができました。予算の執行段階では、当園の女性職員に頑張ってもらって素敵なデザインのユニフォームができました。このデザインには、私は口出ししていません。こういうのは、ファッションセンスの無いおっさんが言ったらあきません。私がユニフォームに関して唯一指示したことは、ユニフォームの完成をプロモーションするときはイケメンに着せろと。イケメンが着たらどんな服でも何とかなんと、だからイケメンを使えと。実際プロモーションに使った写真では一番若い飼育員に着てもらいました。

おかげさまで、私が着任してからお客様も順調に増えまして、平成27年度に173万人、翌28年度が167万人と、数字的にはまずまずの成果が出たかなと思っています。

101計画では園内のゾーン計画なども作りましたが、今後はこれに向けて資源を確保して実現させていかねばなりません。ゾーニングとしては、赤いエリアが計画上大きくは手を付けずに残すゾーン、オレンジのエリアが新しくする動物の施設、青いエリアが飲食・物販のサービス系の施設というゾーン分けをしました。実現に向けては、やっと1つ目のペンギン・アシカの施設の基本設計の予算が取れましたので、設計作業を進めつつあるところですが、私は、もともとペンギンマニアからこの世界に入ったので、ペンギンで魅力的な飼育展示施設を作りたいと意気込んでいます。

評価されるサイクルづくりと最適な経営形態の模索

お話ししてきたように、色々と動物園の改善改革を進めてきましたが、現段階で大きく残っている仕事がこの2つ、評価と経営形態の検討だと思っています。

先ほどの経営サイクルの図で言えば、動物園がサービスを提供して、お客様・市民がそれを受けて、行政

に対して高評価を与え、行政が動物園に適切な資源を与えるというサイクルを回していかなければ持続的に経営できないと思っているものですから、評価が重要になってきます。評価指標としては入園者数をもっとも分かりやすいですね。誰もが分かる、誰にでも評価してもらえる指標です。けれども、入園者数の評価だけではダメというのは、JMMAに参加する皆さんならお分かりだと思います。ミュージアム的な活動を評価する指標をちゃんと設定して、それを使って、内部だけではなくて外にも開かれた形の評価をつくっていかなければいけないと思っています。評価すること自体が目的ではなくて、それが改善につながらなければいけないとも思います。動物園をよりよくするための仕掛けをこれから作っていきたいと思います。

もう一つが、そもそもの経営形態の検討です。現在は、どっぷり市役所直営の動物園ですが、今後きちんと飼育技術を確保したり、運営のための資源を確保したりするためには、直営であることによる自由度の低さが足かせになると思っています。去年秋に、有識者による経営形態の懇談会を開催して、地方独立法化の一つの候補として挙げるところまではきています。

自治体直営の問題は山ほどありまして、人事が硬直的で困るとか、それから予算の使いにくさとか契約制度の硬直性など、公立の園館の方はみんなご存じのことかと思っています。これを何とかしたい。

特に人事の仕組みはなかなかの岩盤です。例えばうちの飼育員は技能労務職、いわゆる現業の職員なのが、現業職は大阪市全体として新規採用が完全にストップしてしまっているのが若手が入ってきません。さきほどのユニフォームのときに登場したイケメン飼育員が一番若手なのですが、彼が確か36歳です。若い人が入ってこずこのまま高齢化が進んでいくのでは将来がありませんので、ここを何とかしていきたいと思っています。

昨年秋に開催した有識者会議では、色々な経営形態を比較して、コレクションの維持や社会的な活動の実施なども評価の軸に入れた上で、今後目指すべき形態としては、まずは地方独立行政法人、次いで公益財団法人等による指定管理者制度の活用を念頭に行政的な検討を行うべきという指摘をいただいています。そのための調査費を今年度取っているのが、コンサルタントを使って新しい経営形態がほんまにお得なのかどうかと分析を進めているところです。

このように天王寺動物園では動物園の改革改善に色々と頑張っております。またぜひ大阪にお越しの折には動物園にも足を伸ばしていただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

大堀名誉会長を偲ぶ

JMMA理事・前事務局長
高橋 信裕



当時、大堀さんは国立科学博物館（科博）の教育部長であられた。館長は、元文部事務次官の諸沢正道氏で、社会的教育機関である博物館経営に「ボランティア」という、それまでは来館者（ゲスト）として迎え入れていた博物館利用者を博物館現場の事業パートナーとして育成しようとする先駆的な事業に取り組んでいた。

大堀さんは、そうした博物館界のエポック的な仕組みづくりに主導的な役割を果たし、博物館ボランティア制度や博物館経営を学際的、業際の見地から取り組むミュージアム・マネジメント学会（JMMA）の創設等に尽力された。科博に事務局を置いたJMMAは、その母体が独立行政法人に移行するなど事務局を外部に委ねたいとの意向が、大堀さんから当時文化環境研究所の所長であった私にあり、とりあえず研究所に事務局を移すことになった。とりあえずとは、今から思うと前後もわきまえない太っ腹な決断であった。大堀さんの太っ腹と小心な私との関係は、それをきっかけに長年のお付き合いに発展していく。

大堀さんは科博退職後、大学の教授、学長、博物館館長を務められるほか、国や行政の委員、役員のお仕事を精力的に果たされた。海外へも足をのばし、私などもお供をすることがしばしばだった。特に韓国の博物館経営学会とのお付き合いは、強く印象に残っている。国内だけでなく国際人としても活躍された大堀さんだが、この八面六臂の活躍を支えた、もうお一人の大堀さんの存在なくしては、大堀名誉会長その人の全容を語ることは出来ないように思われる。大堀さんのすぐお側にあって、献身という労以上に大堀名誉会長を温かく包み込み、周りまでも明るくし、元気にする大堀富子夫人の存在と徳の力を思えば、大堀会長の生涯はどんなにお幸せだったことであろうと偲ばれるのである。

「大堀哲先生を偲ぶ会」開催のご報告

大堀哲名誉会長はかねてより病氣療養中のところ、平成29年8月4日午前0時20分、享年80歳にて永眠されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

故人の業績とお人柄を表すかのように、生前ご親交のあった方々、忘れられない思い出などを共有する方々より「在り日の大堀先生を偲ぶ場を設けたい」とのお声が多く寄せられました。

そこで9月19日に長崎歴史文化博物館にて「大堀哲館長を偲ぶ会」が、そして10月7日には都内ホテルを会場に「大堀哲先生を偲ぶ会」が執り行われました。両会場共に大勢のご列席を賜り、大堀名誉会長がお好きだった音楽が演奏される中、和やかで心のこもった偲ぶ会となりました。



JMMA第23回大会開催日程・会場決定!

JMMA第23回大会開催日程・会場が下記のとおり決定しましたので、皆さまにお知らせいたします。

日 程：平成30年6月2日（土）～3日（日）

会 場：京都国立博物館（京都府京都市東山区茶屋町527）

テーマ：人々とミュージアム —人々が成長するミュージアム—

会員の皆さまには是非ご参加くださいますようお願い申し上げます。

なお、プログラム等の詳細につきましては、内容が決定次第お知らせいたします。

文献寄贈のお知らせ

- 入間市博物館『入間市博物館紀要 第12号』
- 長崎歴史博物館『研究紀要 第11号』
- 京都文化博物館研究紀要『朱雀 第29集』
- 京都文化博物館『2016（平成28）年度年報』
- 神奈川県立生命の星・地球博物館友の会編『友の会で語る博物館の楽しみ方—博物館友の会20周年記念誌—』
- 独立行政法人国立科学博物館編『科学を伝え、社会とつなぐサイエンスコミュニケーションのはじめかた』

新規入会者のご紹介

| | | |
|--------|--------|--------------------------------|
| 【個人会員】 | 安曾 潤子 | （大学研究者） |
| | 井上 瞳 | （愛知学院大学文学部歴史学科） |
| | 上野 敬子 | （武蔵野美術大学美術館・図書館） |
| | 江良 智美 | （帝京平成大学現代ライフ学部人間文化学科メディア文化コース） |
| | 草刈 清人 | （練馬区立牧野記念庭園記念館） |
| | 葛谷 匠 | （京都大学理学研究科） |
| | 西澤 久美子 | （宇治市源氏物語ミュージアム（宇治市歴史史料館）） |
| | 長谷川 暢子 | （東京国立博物館学芸企画部博物館教育課） |
| | 平野 秀治 | （株式会社ギャラリー真庭） |
| | 【学生会員】 | 大西 慶 |
| | 鬼頭 孝佳 | （名古屋大学文学研究科博士後期課程） |
| | 筒井 弥生 | （学習院大学） |
| | 萩原 孝信 | （日本大学理工学部） |
| | 増田 彩乃 | （北海道大学大学院） |

（五十音順・敬称略）

日本ミュージアム・マネージメント学会 法人会員一覧

（2017年10月末現在）

| | |
|-----------------------|--------------------|
| 株式会社 アートプリントジャパン | 東京家政学院大学 |
| アクティオ 株式会社 | 東京家政大学 人文学部 教育福祉学科 |
| 公益財団法人 阿蘇火山博物館 久木文化財団 | 株式会社 トータルメディア開発研究所 |
| 株式会社 江ノ島マリンコーポレーション | 内藤記念くすり博物館 |
| カラータ 株式会社 | 長崎歴史文化博物館 |
| 公益財団法人 交通文化振興財団 | 株式会社 西尾製作所 |
| 佐賀県立宇宙科学館 | 株式会社 乃村工藝社 |
| サントリーパブリシティサービス 株式会社 | 三菱重工業 株式会社 |
| 公益財団法人 竹中大工道具館 | ミュージアムパーク茨城県自然博物館 |
| 公益財団法人 多摩市文化振興財団 | UCC コーヒー博物館 |
| 株式会社 丹青研究所 | 早稲田システム開発 株式会社 |
| 株式会社 丹青社 | |
| 公益財団法人 つくば科学万博記念財団 | |

（五十音順・敬称略）

学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No.81 (Vol.22 no.1)

発行日 2017年10月31日

事務局 〒135-0091 東京都港区台場2-3-4 (株)乃村工藝社 文化環境事業本部内
TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 齊藤恵理、吉岡 伸、小川美江子

HP : <http://www.jmma-net.org/> e-mail : kanri@jmma-net.org

印刷制作 光画印刷株式会社